やはり俺は間違え続け、そして――

ウッドコースト

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

４月、新年度を迎えた総武高校。

３年生に進級した比企谷八幡は、以前と同じようなボッチに戻っていた。

なし崩しに解散状態になった奉仕部。２人の少女も、自分を見つめなおす時間を迎える。

そして彼ら彼女らと縁のある、それぞれの人々も。

間違えた青春の後の、残骸のような日々。その先にあるのは、はたして――。

＊原作１４巻前後から、バッドエンドに分岐した、その後の物語として考えています。

＊アンチ・ヘイトは意図していませんが、部分的にキツめの表現が出てくるかもです。

＊オリキャラがけっこう出てくる予定です。

以上の点をご了承ください

目　次

1、3月／登校日 ―― 1
2、3月／春休みの終わり ―― 13
3、4月／始業日 ―― 28
4、4月／始業日（夕刻） ―― 37
Interlude……（結衣） ―― 49
5、4月／入学式（1） ―― 53
6、4月／入学式（2） ―― 65
7、4月／入学式（3） ―― 75

1、3月／登校日

ふわりと、目の前を桜の花びらがよぎった。
視線がつい後を追ってしまい、箒を握る手が止まる。流れる微風が頬の産毛をくすぐり、さらさらとせせらぎのような音が耳に届く。
風の来た方――渡り廊下の吹き抜けからは、春の日差しが溢れている。
その光に急に疲れを覚えて、俺はため息を吐いた。
3月も終わりに差し掛かり、天気は着実に、暦に追いついて来ていた。
空は雪解けの清水を思わせる柔らかな色に晴れ渡り、中天に浮かぶ太陽は優しげに輝いている。無人のグラウンドはかすかな黄金色に染まり、再び学生たちが訪れるのを、静かに待っているようだった。
体育館前の渡り廊下には、俺のほかに生徒の姿はない。掃除担当のポジション的に、ここは好き嫌いの分かれる場所だ。こんな日の、のどかな景色をひとり占めできるところは、まあ、なかなか悪くないのだが。
箒を柱に立てかけて、背筋を伸ばす。
大気には水と土の気配が色濃く漂い、深呼吸をすると、肺いっぱいに、かぐわしいものが満ちる。風が吹くと、校庭から幽かに甘やかな香りが運ばれてきて、空気にいっそうの華やぎを与える。
のどかな日和。眺めもよく、ひなたなら適度に暖かい。清掃場所としては、贅沢に過ぎるくらいだ。
厄介なことといえば、桜の花びらがヒラヒラして鬱陶しいってこと、風が強まると、そのたび仕事がリセットされて、いつまでたってもここを離れられないってこと。
ざあっと、木々が一斉に朗らかな笑い声をたてる。
さらさらと、足元で花びらが戯れる。
あー、桜キレイだわー。涙が出そうだワー。
卒業式をつつがなく終えて、総武高校は短い春休みに入った。
短いとはいえ、休みは休み。

本来なら残り僅かとなったモラトリアム期間を惜しみつつ、ダラダラと快適な自室でだらけるか、千葉方面の書店のハシゴにでもいそしむのだが……登校日の午後に特別清掃とか、ちょっとかったるすぎない？　そこは学校の偉い人、空気読んでほしいなぁ。

心の中でぶちぶちと文句をこぼしつつも、箒を握りなおす。

前進再開。

ひと掃き、箒を振るごとに、淡い花びらがふわっと舞い上がり、春の空気と戯れるように軽やかに乱れ、やがて地に降りて、再び伏せる。最初はその美しさと物悲しさに見入ってしまったが、5分もすると飽きてしまった。だって、ヒラヒラ飛び散るばかりで、なかなか進まないんだもん。イライラしてくる。

行く手を見れば、渡り廊下の反対側の端まで、まだ半分以上の距離が残っている。ああ、くそ。ため息しか出てこない。

教師なら、人生に例えそうだなと思った。「掃除は人生の縮図だぞ。手を抜いていたら、どうにもならないくらい汚れきってしまうからな」とか。厚木あたりが言いそうだ。

人生は掃除ほど単純じゃないだろ、と思う。

ちゃんと前に進んでいるのか怪しいし、綺麗にしてるつもりが、逆にゴミを撒き散らかしているだけかもしれない。そうしたゴミは、時間がたてば黒くベタベタした汚れになって、壁の隅にへばりつき、二度と取れなくなる。人が、後悔とか黒歴史とか呼ぶものに成り果てて。

でも、そんなもんだ。

人生はどこまでも清潔で、綺麗なものだけで出来ているべき？　――まさか。

つーか、そろそろ手が痛くなってきた。これ終わりそうにない。あー、サボりてえ。

もともと掃除は好きじゃない。箒をつかうのがかったるくて、小学生の頃から終業時の清掃は憂鬱だった。そもそも掃除が好きな奴なんて見たことないけど。どっかのヤクザ顔の高校生みたいな奴にはついぞ会ったことがない。むしろ事あるごとに俺が押し付けられて

たまである。クラスメイトが俺の名前を呼ぶのは、そういう時だけだった。「なあヒキヤ、お前今日これから用事とかある？」なんだよその、まさかあるなんて言わないよな、ていう無言の脅迫は。あれで夕方5時からの再放送を、なんど見逃したことか。てか最初は、「え、もしかして俺を遊びに誘ってくれてたりするの？」って心の中でトキめいちゃってたんだぞ。一人でえっちらおっちら机を運びながら聞いた、同級生たちの弾けるような笑い声と、廊下を走り去っていく賑やかな足音は、今でもたまに、泣きたくなるくらい夕日のまぶしい日にフラッシュバックします。

渡り廊下の半分を過ぎた辺りで、限界を迎えた。

疲れた。

手が痛え。

サボりてえっ！

ささやかな恨みを込めて、風に舞う花びらの一つを目で追う。

開花の早かった桜は早くも散って、こうして無残な死骸をさらしている。うんざりしてはいるが、それにしても、花は死に際すらも綺麗なものだ。穏やかな陽光を反射するリノリウムの床は、静かな川のようで、そこに散る桜の白さ儚さが、いっそう引き立っている。

水面に浮かんだ花びらを、花筏（はないかだ）なんて呼び方をするんだと聞いたのは、最近のことだ。花の残骸に対して、ずいぶんと美しく風流な呼び名をつけたものだと感心すると同時に、その言葉を発明した昔の誰かに、ひどく残酷な感性を見た気がした。

しかし、国語で俺の知らない知識を人から聞くと、前は嬉しかったり面白かったりしたんだけど、最近は単純に喜べない。あ、それ知らなかった、やべーな、と、腹の中がきゅっとすぼまるような焦燥感を覚える。ちょっとナーバスだ。

来てほしくないと願う未来ほど、気づけばすぐ後ろに立っていて、ぽんと肩をたたいてくる。おそらく半年後の俺は、去年の小町の比じゃないくらい、殺伐とした状態になっているはず。はぁー、やだなー。勉強したくねえなぁー。働きたくねぇなぁー。

思わず先々の人生にまで思いをはせていると、ひたひたと小柄な足

音が校舎側から聞こえてきた。
「お、サボってる人、発見―。いーけないんだー」
「サボってるんじゃない。小休止だ。あとその言い方、いつにも増してあざとすぎるから、やめろ」
なんなの、その一昔前のギャルゲーちっくな会話の入り方。どこで覚えてきた。
振り向くと奴がいた――カエル、もとい亜麻色の髪を揺らし、大きな瞳にニマニマと笑みを湛えた、小悪魔系の後輩。
現・生徒会長、一色いろはは、今日も可憐であざとかった。
細身の制服をすらりと着こなしたサマは、今日も今日とて完成度が高い。後ろ手を組んで、小首をかしげてこちらを覗き込むような、いかにもなポーズ。秋葉系のアイドルも真っ青――もとい、真っ赤になりそうだ。ブレザーの下にはカーディガン。冬の間はピンクをよく来ていたが、今着ているのは淡い若草色のニットで、それがいつもの可愛らしさに溌溂とした印象を添えている。
会長殿は、あたりを一瞥すると、意地の悪い笑みを浮かべた。
「うわぁ、ぜんぜん進んでないじゃないですか……今までずっとサボってたんですかぁ？」
「ちげーよ、掃いても掃いても、風吹くとすぐリセットされんだよ、ここ」
まさに風来の試練。そこらの床にマジックで「ぜんめつ」とか書いても、花びらが全滅してくれたりはしないし。むしろ俺が落書きの咎でゼンメツされちゃうまである。
――いや、もうそんな暴力を振るわれることもないのか。
「まあ、先輩一人じゃ無理だろうってのも分かりますけどね。いいですよ、ここは私、見なかったことにしてあげますから」
「いや、だからサボりじゃなくて休憩だっつの……」
俺の抗議には耳を貸さず、うふふと笑いながら、一色は近寄ってくる。
左の15度くらいにコテっとかしげた首は、間違いなく黄金の角度。制服の肩口に流れるセミロングの一房とか、反対側のうなじの白

さとか、いろんなイメージがさわさわと押し寄せてきて、分かってもその仕草がちょっとばかり可愛く見えて、つまりはそれやめろ。その技は俺にはもう効かん。効かないんだからさ――きかないってば。それいつまで続ける気なのん？

「あはは、実のところ、校門の方も大変そーみたいでしたよ。適当なとこで切り上げて、ぼちぼち帰り支度に入ってる人たちもいますし」

「は？　なにそれ、もう終わりでいいのかよ」

「まあ、今日の清掃は、3年に上がった人たちに、『これまでの学校生活への感謝を込めて奉仕してもらおう』って理屈みたいですし？　カタチだけってことなんじゃないですかね」

奉仕という言葉を口にするとき、少しだけその声音が、固くなったように聞こえた。

「おいおい、なんだよその理屈……感謝って、強要されるものじゃないだろ」

なんで学校側から、「生徒のみんな、ウチへの〝ありがとう〟を込めて、お掃除していってね♪」なんて言われにゃならんのだ。そういう気持ちの表明こそ、自主性を尊重するべきなんじゃなかろうか。具体的には、自由参加とか、そういう形で。

「そうですかね、わたし最近、折につけ『ありがとうございましたー』って言わされてますけど」

「お前の場合、普段から口にしてるだろ。クラスの男子を、お願い光線で洗脳する時の仕上げとか」

生徒会長の仕事で「ありがとうございました」を言わされる機会が多いってことなんだろうけど、もともと言い慣れてそうだよな、こいつ。ノート見せてーとか、ちょっとここの席使っていいかなー、とかの軽いお願いなら、女子はたいてい「ありがとー」の一言で完了させる。見てくれが可愛ければ、言葉一つの報酬でも、喜んで働く男は多い。

たとえば、クラスメイトに掃除を押し付けられたある男子が、翌日、クラスでも2番目くらいに可愛い女の子から「ヒガヤくん、昨日はごめん、ありがとね」ってニッコリ言われて、「あ、うん、ぜんぜんだい

じょぶだから――なんだったら、また……」とか答えちまったケースなんか、その最たるものだろう。その男子は、その日から永世掃除当番の二つ名を拝命したことは言うまでもない。ちなみにその女子とは、その後卒業まで、2、3回あいさつ程度の会話しか出来なかった。お礼の言葉も二度と貰えなかった。

　そんな悲しいエピソードはさておき、小悪魔ぢからを指摘された一色は、心外とばかりにぷくーっと頬を膨らませた。

「普通に失礼すぎませんか。今はもうそういうの、あんまりしてないんですよ、これでも」

「ああ、そうだったのか、ワリい。――で、『今はもう』ってことは、前はしてたってことだよな」

「～♪」

　明後日の方へ視線をやってぴひゅーと下手な口笛を吹きだした。もういいよ適当で。

「……ま、人に頭を下げる事に抵抗がないってのは、将来役に立つかもしれんぞ。お前、社畜の才能がある」

「なんてコト言うんですかぁ!? わたし、年収８００万以上の若手イケメン俳優かＩＴ社長と結婚して、専業セレブとして、わたし似の可愛い女の子の育児日記とかインスタに投稿して、『いいね』をたくさんもらうような生活が夢なんですよ!?」

　とんでもないことのたまいますね、キミ……。

　そういう奴はたいてい、空気を読まない幸せアピールから発火・炎上して、泣き詫びコースになるって、有名タレントの皆さんが教えてくれてるじゃない。もっとワイドショーで勉強しなさい。

　しかしインスタうんぬんの部分を削ぐと、こいつの言ってることって、ほとんど俺の口から垂れてくるタワゴトと同レベルですね……。つまり俺も、逆玉狙いＪＫだった？　年収８００万のＩＴ社長サン、来てきて！　あなたのハチマンはココよぉ～（野太い声）。

　ひとしきり無駄口をたたき、冗談を飛ばす。一色の声が、さざ波のように、微かに揺れる。

　やがてどちらからともなく、ふっと、ため息に似た呼吸が漏れた。

天使が通りすぎた、という言葉がある。
フランスのことわざらしい。ようは会話の接ぎ穂が途切れ、自然と沈黙が訪れることだ。
いかにもフランス人が好みそうな、洒落っ気が過ぎる言葉だと思っていたが、今だけは本当に、見えない何かが通り過ぎたように、２人とも言葉を失っていた。
静寂の中、桜の花びらが床をこする音だけが戻ってくる。繋いでいた手を離された子供のように、どうしていいか、分からなくなった。
会話が途切れた一色は、居心地が悪そうに視線をさまよわせている。毒舌や退屈そうな態度は何度も見てきたが、そんな、どこか怯えるような姿を目にしたのは初めてだった。
頬が熱くなる。
認めたくはないが。
俺はいま、こいつに、気を遣わせたのか？
「――すまん一色、なにか用事、あったんじゃないか？」
「え、あ――そ、そうです！　こんな漫才をやりにきたんじゃないんですってば。ちゃんと用事があったんです！」
当惑から立ち直った一色が、慌ててマジメな顔をする。
「ん、そりゃ悪かった」
羞恥心を飲み下し、なるべく静かな声で謝罪した。そもそも３年じゃないこいつが、今ここにいるのも、生徒会の仕事でもあったからだろう。その時間を割いて、俺のために来てくれたのだ。余計な時間を食わせるべきじゃなかった。
「んで、用件はなんだ？」
改まってそう尋ねると、また沈黙が落ちた。数秒の間、一色の目が俺から外れて、宙をさまよった気がした。
「その、部活についてのことです」
「そうか」
目で先を促すと、一色は、虫歯の痛みにでもおびえるように、口を小さくもごもごさせながら、そっと言葉を紡いだ。
「たまたまそこで、新しい顧問の先生と会って、訊かれました」

端的な言葉。
怯えるような声音。揺れる抑揚。
――ふと、野球のキャッチャーは、こんな感覚なのだろうかと思った。次の瞬間に、衝撃が飛んでくることが分かっている状態、というのは。
「その、部の……」
言葉が途切れかける。
だが大きく息を吸い、意を決したように一色はまなじりを上げた。強い光が俺に向けられ、けれど俺を通り過ぎて、いずこかへと飛んでいく。多分その視線が向いているのは、今ではない、いつかの時間だ。
「奉仕部の」
「おう」
――まるで埋葬されてゆく思い出を見送るような。
そんな目を、真っすぐに見返しながら、俺は一色の次の言葉を待った。

一色が去ってから、適当に掃除を切り上げる。
ヨソが手抜きで済ませてると知った以上、こっちも律義にやる必要はない。ていうか、うすうす分かってたけどね。風が吹くたび散らかるわ、外から新しい花びらが流れ込んでくるわで、やってもやっても終わらないって。学校側も仕上がりは期待してなかったろう。あらかじめ「適当に切り上げていいぞ」とか言ってほしかった。
掃除道具をロッカーにぶち込んで、手を洗う。それから、ぶらぶらと歩きだした。
校舎のあちこちからは、箒を掃く音や、机の脚が床をこする音、そして誰かの笑い声が聞こえてくる。残っている新3年生が、まだまだいるのだろう。リア充とその眷属どもからすれば、こんなかったるい行事でも、思い出作りの一環になるということか。
あるいは、今のうちが最後の猶予期間だという事を、彼らも本能的に悟っているのかもしれない。
夏休みに突入するころには、受験ムードが本格化するだろうし、秋

ごろには友達と休日に遊ぶ余裕さえも無くなってくるはずだ。なによりその頃になると、友達は潜在的なライバルになる。同じ大学を目指しているならばもちろん、そうでなくても。――たとえば模試の判定で、一方がよりいい評価をもらっていたら、その2人は、もはや純粋な友情だけでは繋がっていられなくなる。危機感と、僅かな安堵感をトレードしあう関係。相手を意識し、心の内で競い合う関係。

たとえ好意は変わらないとしても。

ただ好きでいるだけでは――〝一緒にいるだけでいい〟、では、いられなくなる。

つまりは、『お前に足りないのは危機感だ』って煽りあう関係だな。『お前まさか、まだ自分が落ちないとでも思っているのか？』……あ、いかん、これダメ。このネタ、自分へのダメージでかすぎる。いま自分の言葉に、ちょっと心臓止まりそうになった。

アホなことを考えている間も、足は止めない。

特別棟に入ると、生徒たちのたてる掃除の音は、小さく遠ざかった。頻繁に使う教室ばかりではないし、立ち入り禁止の部屋なんかもあるから、こっちの掃除はすぐに終わったんだろう。

通いなれた廊下を、静かに歩く。荒々しく床を踏み鳴らしたりはせず、ことさら忍び足もせず。ただ、試合に臨む武道の選手のような気持ちで、一歩一歩、足を運ぶ。

別に誰かと戦うわけでも、重要な決定をくだす会合に向かうわけでもない。

重要な決定は、もうすでに下されている。だからこれは、後始末のようなものだ。

奉仕部の部室は、開いていた。

くっと力を入れれば、一度がたりと音がし、そこからはするりと戸は動く。

ふっと、紅茶の香りが鼻を撫でたような、そんな気がした。反射的に、部屋の奥に目が吸い込まれる。窓辺にたたずむ、長い髪を揺らした少女の姿――。

もちろん錯覚だ。部屋の空気は冷たく、かすかに埃の匂いがする。

窓辺の影と見えたのは、開け放した窓からの風に、カーテンが揺れているだけ。光の加減で、女の子の髪に見えただけだった。
空気がこもっていたから、換気をしていたといったところか。
「おお、来てくれたね」
横手から、そう声をかけられる。
部屋の奥でなにやらやっていたらしい先生が、こちらにやってきた。年のころは六十から七十くらい、ヤギみたいなお爺ちゃんだ。しょぼしょぼした小さな目に、縁無しの眼鏡をちょこんと乗せている。顔は覚えている。たしか数学の先生だったはずだ。俺は捨て科目だったから、この人の授業、ほとんどマジメに受けてこなかったけど。
「えー、と、寒川先生、でしたよね」
「うん、よく覚えていてくれたねぇ。君たしか、ボクの授業、寝てばかりだったのに」
ほっほっほっと、朗らかに先生が笑う。
やべ、気まずい。おじいちゃん先生は笑っているけど、内心はどんなものだか。自分の授業で堂々と居眠りする生徒なんて、面白い存在のはずがない。てか、この先生が俺なんかを覚えてくれてたことがまず驚き。「そういえば君の名前は、えーと、ヒノモトくんだったかね？」「いえ、ヒキガヤです……」「あー、そうだった、そうだった」。
若干微妙な気持ちになるが、不満を言える立場でもない。軽く頭を下げた。
「その、すみません、数学はどうにも苦手で、はい」
「うん、気にせんでいいよ。君みたいな生徒は、どこのクラスにも2、3人はいるから」
ナチュラルに流された。怒ってはいない、のか？
「勉強をするのは結局本人だからねぇ。数学に興味を持ってもらえないのは残念だし、それはボクの力不足でもあるから、申し訳ないとも思うけど、本人が興味が持てない、必要ない、というなら、それも仕方ない」
ほがらかな口調で、けっこうドライなことを口にする。

寛容な先生ではあるけれど、これ見方を変えれば、『後で困っても君の自己責任だからね？』て言われてるようなもんだよな……。
「ま、もしも必要になったら、その時には改めて勉強すればいい。その時に、スタートがちょっと楽になるかどうか、ボクの授業はその程度の違いだよ」
こともなげに言って、寒川先生はのんびりと自分の顎を撫でた。あんまり接点はなかったけど、こうして話してみると、なかなか印象深い人だ。
「それで、離任された平塚先生に代わって、ボクがいちおうの臨時顧問という事になるんだけど」
「あ、はい……」
だしぬけに投げられた言葉に、少し固まる。
いまさら。
いまだに、だ。
卒業式と同時に、離任式が行われたのも、つい先日のことだった。その場で平塚先生の離任が正式に発表され、別れの挨拶が告げられた。
あの人はもう、この学校にはいない。
「そもそもボクは、この奉仕部という部活が何をする部なのかも、よく分かってないんだ。生徒の悩み相談みたいな部活らしいとは聞いているけど」
「はい、まあ、そんなものです」
「君たちも、もう3年だし、あまり部活に出てくることもないだろうけど、いちおう書類上の管理は必要でね。確認しておきたいんだが」
「はい」
「部長は君でいいのかい？」
先生の質問に、体が冷えたような気がした。
部屋の温度は変わらない。ならばこれは、俺の心が作り出した温度だ。
かつての暖かさの記憶を覚えているからこそ、ぬくもりを鮮明に記憶しているからこそ、その欠落は、痛いくらいの冷気となって、俺を

くるんでいく。
紅茶の香りも、明るい笑い声も、静かに紙のページをめくる音も――すべてはもう、過去のものだ。
総武高校、３年の春。
かつての奉仕部の部室にいるのは、俺だけだった。

2、3月／春休みの終わり

登校日の翌日は土曜だった。

当然、次は日曜日で、そこで春休みはおしまい。月曜が始業式、その次の火曜を入学式として、新年度が始まる。

そう、始業式の翌日が入学式なのだ。

わざわざ分けるなんておかしな事で、本来はありえない。種を明かせばお粗末な話で、新入生に郵送した入学案内の日付が、ミスプリで始業式の翌日になっていたとの事。戸塚筋の情報では、平塚先生の離任で、雑務を引き継いだ誰だかが、文面をよく確認しないまま発送しちまったらしい。発覚後に学校側は、慌てて訂正の連絡を入れたけれど、今さら言われても都合がつかないやらなんやら、多くの保護者から猛反発を食らって、結局そのまま行くことにしたという。

平塚先生は、やっぱり偉大だったんだなーと、しみじみ噛みしめる春のひと時……ていうか、若手に仕事押し付けすぎじゃね？　ウチの学校、とんだブラックスクールだぜ。

社会の恐ろしさに改めて身震いをし、やはり働くなんてロクでもないという思いを新たにしつつ、俺は春休みの残り時間をダラダラと消化していた。

さすがに三年ともなると、いまさら新年度の前に準備など必要ない。だが新入生となるわが妹は、そうもいかないようで……。

「えーっと、こっちがいいかな、それとも……」

土曜の昼下がり、リビングでダラダラしていると、小町の部屋から、なにやらぶつぶつと聞こえてきた。ドアも閉めずに、お悩み中らしい。

カマクラの尻を無心に突っ付くのにも飽きてた俺は、テーブルの下から立ち上がりざま、うんと背を伸ばし、そのまま妹の部屋に足を向ける。

「何やってんだよ、お前……」

「んー、見ての通り、自分の美的センスと格闘中」

案の定、開きっぱなしのドアから中を覗くと、妹は鏡の前で、自分

の頭をいじくり回してる最中だった。鳥に突つかれたように乱れた髪に、櫛やらヘアピンやらを当てがって、ああでもないこうでもないと、一心不乱にヘアメイクをしている。そのさまはお洒落をしているというより、毛玉のオブジェでも捏ねているみたいだ。

視線を移すと、机の上にはリボンや髪留めなんかが、アクセサリー屋のごとく並べられている。随分いろいろと持ってるんだな……。こう言ったらなんだが、まるでカラ――げふんげふん、ちっこい小動物が、宝物をせっせと巣に蓄えてるのを見たみたいで、ちょっと微笑ましい。

だけど中には、宝石みたいにキラキラした石が付いてる品なんかもあって、ちょっとびっくりする。もちろん、そこまで高価な物なんかじゃないだろうけど、なんだか落ち着かない。そっちにあるリボンは紫のサテンで妙に色気があるし、その隣の髪留めとか、シルバーっぽいけど、まさか本物の銀なのか？　巻貝をあしらった意匠がとてもシックで、この前まで中学生だった奴の持ち物とは思えない。

しかし、とも思う。

たぶん似合わないわけじゃない。こういった物を身につけて、めかしこめば、こいつはもう、それなりにサマになるはずだ。妹の成長は早い。気が付けば子供の領域から、もう足を踏み出しかけている。そして、そういう妹の姿に惹かれて集まる男どもも、これから先、うじゃうじゃと湧いて出てくるのだろう。たとえば大志とか大志とか。あの仏像顔、もし高校デビューで浮かれて小町にちょっかいかけてきたら、シェルブリットぉバーストォゥを食らわせてやるからな。

想像の中の、角を生やして舌をチロチロさせてる大志に向かって、ガルルッと敵意を掻き立てていると（それもう大志じゃないよね？）、小町がうあーと猫じみた声を出した。

「だめだぁぁ、決まらないぃ」

「なあ、あんま気合い入れ過ぎると浮くぞ。ウチは一応、まじめな校風だからな」

もちろん、三浦とか、川なんとかさんみたいに、派手にメイクしたり着崩してるのもいるけど、あれは少数派だしな。入学式から『そう

いうキャラ』でいくと、後から辛くなる。
「んー、分かってるよ。でもでも、高校デビューなんだよ！　小町にとっては一生に一度の！」
　小町はこっちに振り向くと、両手を広げて力説する。確かに一度きりだけどさ。つか高校デビューが一生に何度もあるとか、どんな無間地獄だよ。
「高校生って、やっぱり大人に近くなるじゃない」
「いや、ぜんぜんガキだぞ……」
「それでも！　中学生に比べたら！」
「……まあ、世間的にはな」
「だからこそ、ここで一つ、ビシィッと決めたいじゃん！」
　分からなくもない。俺も高校に入学する時、期待と不安に心臓をシェイクされながらも、新しい自分に生まれ変わるぞーっ、とか夢見てたからな。入学式にすら出れなかったけど。
　しかしまあ、もし事故に遭わなかったとしたら、俺のことだ、高校デビュー目指して勘違いムーヴした挙句、同級生からの侮蔑や嘲笑に串刺しにされて、ビシィッと磔死体にでも成り果てていたに違いない。
　小町なら、きっと俺より上手くやるだろう。中学でカースト上位に食い込めた実績を見ていればそれは分かる。ただ、無駄に背伸びをしていると、結局どこかでコケるというのが、この世の真理だよなぁ。
「なあ小町、高校に入ったからって、お前が急に大人になるわけじゃないぞ」
「えぇ～？　それは分かってるけどさぁ～」
　不満げな妹を制して、俺は言う。説教臭い調子にならないよう、できるだけ、そっけなく。
「いろいろと目新しいことも出てくるだろうけど、今まで通り、お前はお前のまま、一日一日を過ごしていくだけだ。その当たり前の一日一日を通して、ちょっとずつ、お前の目指す大人に近づいていくしかねーんだよ」
　ゆっくりと、言葉の一つ一つを手繰るように言うと、小町は驚いた

ように目を見開いた。
「お、お兄ちゃん……具合でも悪いの？」
おい。
「お兄ちゃんの口から、まっとうな言葉が出るなんて……」
なんなの？　俺がまじめなこと言うと、天変地異でも起こるわけ？
これでも割とマジメな方なんですよ、ボク？
「いつもだったら、『へっ、変わりたい？　アタマ空っぽ、ジブン空っぽなアホほど、簡単に変わるってまくしたてんだよ』とか腐った意見を吐くのに」
手加減しろよ……俺のこと、分かりすぎだろ。
「あのな……とにかくまあ、劇的に変わろうとか考えない方がいいぞ。入学式の翌日からも、学校は毎日あるし、その毎日を上手くやり過ごしていく事は、他の誰かに肩代わりしてもらう事は出来ないからな」
そもそも劇的な変化なんて、そうそう起こせないものだ。まあでも、小町が三浦ばりに金髪に染めて「あーしさー」とか言い出したら、それはそれで劇的な変化ではあるが、その時にはお兄ちゃん、自分で自分の目を潰しちゃうよ。
「いや、さすがに金髪とかはしないよ……小町の目指す方向じゃないし」
懸念を伝えると、小町も微妙な顔で答える。自分の可愛らしさの性質を理解してるから、それが生かせない方向は考えてないみたいだ。よかった。世界の滅亡は回避された。
「んーでもでも、やっぱり一大イベントだし、ただ無難にやり過ごすってのも、なんかやだなぁ」
「まあ、後悔しない範囲で好きにしたらいいんじゃね？」
「その範囲を見極めるのが難しいんだってば」
やだもう、ワガママね、この子ったら。
「と、いうわけでっ！　今日はお試しデイとします！」
「は？」
何を唐突にと、怪訝な視線を向けると、小町はふりふりと生意気な仕草で人差し指を振った。

「だーかーらっ、お試し！　慣らし運転、リハーサル、みたいなの！」
「リハって――入学式の？」
　脊髄反射で聞き返すと、小町はしらっと冷えた眼差しを向ける。
「なにアホなこと言ってんのごみぃちゃん。２人でどうやって入学式のリハすんの？　脳内のお友達に出席してもらうの？」
　いやたぶん違うって分かってたけどさ――もうちょっと手加減してよ。
　ダメージに膝を折りそうになっていると、「じゃなくて」と小町は苦笑混じりに言った。
「ふ、く。学校の制服、別に入学式の前だからって、着ても問題はないわけでしょ？」
「あ、ああ――多分大丈夫なんじゃないか」
　校則とか、詳しく把握してるわけではないけど、式の前に制服を着たから入学取り消しとか、そんな話はさすがに聞いたことない。
「だから、制服の慣らし運転。ついでに髪型のシミュレーションもやっちゃおうってわけ」
「はあ」
　まあ、いいんじゃないすかね。
「なにポケっとしてるの。小町これから髪をまとめるから、お兄ちゃんも着替えてきてよ」
「はえ？」
　戸惑いまじりに見つめ返すと、小町は鼻を鳴らしながら、芝居がかった仕草で片目を瞑ってみせた。
「一緒にそこのショッピングモールまで行くんだよ。ごみぃちゃんでもそれくらいできるでしょ？」
　まる２年間、毎日続けてきただけあって、制服に着替えるのには５分もかからない。
　鏡でネクタイの結び目をチェックしつつ、なんでこんなことまでせにゃならんのかと自問する。
　まあ小町が制服着るのに、俺は私服とか、どっちも居心地が悪くなるのは確かだし、ならば俺が折れるのは筋だ。うん、問題ないか。

ちゃちゃっと身支度を終え、点検を繰り返す。襟のフケとかもないし、うん、こんなものだな。妹はまだ来る気配がない。あの様子じゃもう少しかかりそうだ。

手持無沙汰になって、リビングの椅子に腰を下ろし、スマホぽちぽち暇つぶしに入る。んー、今日も世界は嫌なニュースに満ちているな。ニュースサイトの見出し一覧とか見てても、ほんと気が重くなるだけだ。どうせならスマホのニュースサイトはプリキュアとライダーに関連するニュースだけ流すようにしたらどうかしら。小さいお友達も、大きいお友達も、みんな幸せになれるんじゃないかな！（まっとうになれるとは言っていない）

気を滅入らせていると、スマホがぶるぶる震えて新着メールを告げてきた。すぐ確認するが、ただの広告だ。

息を吐いてウィンドウを閉じようとする。が、指が滑ったのか、誤って別のボックスを開いてしまう。スマホはこれがイラつくんだよなぁ。タップの誤感知。

表示されたのは、通常の受信ボックス――つまりは家族や知り合いからのメール一覧だ。

その一番、上。

最新の受信日は、卒業式の翌日だった。俺たちが無い知恵絞りだしてどうにか勝ち取った、あのプロムの開催された日の――翌日の夕刻。

差出人の名前が、目に入る。

アプリを終了させ、リビングの中に視線をさまよわせていると、しばらくしてドアが開いた。

「お兄ちゃん、おまたせー！　って、どうかした？」

「ん、いや、暇だからな、ぼーっとしてただけだぞ」

何か言いたげな視線を感じた。が、それも数秒のこと。

小町はすぐにニパッと笑顔を決めると、俺の前でくるりと一回転してみせる。

「ほらほら、どう？　高校生に進化した小町の晴れ姿は？」

「ん、おお…」

改めて小町に目をやって、俺は目を見開いた。
トランセルがバタフリーに、というと大げさだが、妹は確かに、一段階、脱皮したように見えた。
おろしたての制服は、生地もまだツヤツヤでパリッとしている。黒のブレザーはタイトで大人びたデザインだから、正直まだまだ小町には荷が重いかなと思っていたが、どうしてどうして。妹の可愛らしさと明るさが、ともすれば固い印象になりがちな制服を、元気で活き活きした方向に引っ張っている。小町ちゃんてば、軍服とか着せても様になりそう。「司令、よろしくお願いしますっ☆」とか言われたらトキめいちゃうよ。レアリティは星４以上は確実ですな。バリバリ課金しよう。――嘘だよ。課金は節度を保って、趣味の範囲でな。みんな、ハチマンとの約束だゾ☆。
「――なんか変なこと考えてるでしょ？」
「いやぁ、ぜんっぜん！　……本当に、よく似合ってる。兄じゃなかったら惚れちゃいそうだ」
「あはは、気持ち悪い冗談は顔だけにしてよね、ごみぃちゃん」
顔だけで笑いながら、小町はツッと後ろに下がる。その反応、けっこう傷つくからやめて。
「まあ冗談は置いといて、見違えたぞ。その髪もな」
「ん、そ、そう？　えへへ、それはそれは……」
頬を掻きながら、小町は俯いて、ぼしょぼしょと言葉を濁す。
妹の髪は、さっきまでの苦闘の跡が嘘のように、綺麗に櫛が通されていた。いつもなら頭のてっぺんあたりでピンと立っている遺伝のくせっ毛もなりを潜めて、ふわっと可憐なショートボブに纏められてる。装飾は一点、さっき部屋で見た、あの紫のリボンのみ。先ほどは艶っぽいと映ったが、制服姿に一点だけ合わせると、森の木陰に一輪だけ咲いた桔梗みたいな、奥ゆかしい可憐さが出てくるから不思議だ。デビューを控えたティーンアイドルとか言われても納得してしまいそう。
「へへっ、あれこれ悩んだけど、お兄ちゃんと一緒なら悪目立ちするより、普段にプラスアルファしたくらいが一番かなって」

「おう、いつもどおりだけど、いつもより百倍ましくらい可愛いぞ」
「ま、まあ、小町が可愛いのはこの世の真理だし、当然だよね！」
「もちろんだ。だけどそういうことは、外では声に出さないようにな」
「ふっふーんっ、当たり前じゃん、そんなの」
まあ今さらな心配だとは思う。でもこいつ、計算高いように見えて、抜けてるとこもあるからなぁ……。ときどき心配なんだよね。
「さて、で、行くか？」
気分を切り替えて、なるべく朗らかな口調で言ってみる。
「もちろん」
満面の笑みの小町が、率先して玄関に向かう。
やだ、お兄ちゃんと出かけるの、そんなに嬉しいの？　このブラコン天使め。
数日ぶりに、ちょっとウキウキした気持ちで、俺も後に続いた。
ショッピングモールは人出で溢れていた。
新年度を控え、準備やらお祝いやらで買い物をする人間が多いのだろう。エントランスを流れる姿には、明るい春物のコートや、晴れやかな笑顔が目立った。その中には、真新しい学生服の姿もちらほらと散見する。施設内もあちこち桜の造花やら、ピンクのポップアップやらで飾り付けられ、おめでたムード一色だ。
「えへへっ」
「なんだよ」
隣を歩いている小町が、急にニマニマし始めたので、軽くたしなめる。いや、俺は可愛い妹の笑顔は全然ＯＫだけど、外ではもうちょっと自重しような、外では。
「や～、なんか、合格したんだなぁって思って」
「いやお前、今まで散々お祝いしてたじゃないの？」
お疲れ様会やら、おめでとう会やら、よろしく会やら……俺によろしくしてくれるのは勇気だけだな。愛と勇気も、全然無いけどネ！
「んー、まあ、それはそれ？　まだ実感無かったっていうか」
「ええ……卒業旅行まで行っておいて、実感がないって、どうなんすかね……」

このまえ、友達同士だけで2泊3日かけて東京横浜の周遊旅行いっておきながら、まだ実感なかったのかよ。ていうか、あの旅行の詳細も気になってる。変なことはしてないと思うんだけど――あんまりしつこく尋ねた挙句「お兄ちゃんウザイ」の一言で撫で斬りにされて以来、二度とは尋ねることが出来ないでいる。今でもちょっぴり心配です。

「なんていうか。今までは『合格した』っていうより、『受験が終わった』ってことに喜んでいたような気がする」

「あー、それな」

なんとなく、言いたいことは分かる。

受験が終わって感じるのは、合格した喜びとか、卒業してしまう事への寂しさとかよりも先に、まずは圧倒的な解放感だ。ソースは俺。合格した日の夜にやった徹夜ゲームは、背徳感も相まって脳汁ドバドバ、マシマシだったな。終わったんだから別に背徳感なんて感じる必要ないのに。あれってなんでだろうね。

「でもさ、こうやって、いよいよ入学式が迫ってきて、その前に制服を着て歩いていると、なんか、こー、ね」

「実感がわく、か」

もしかしたら、家族である俺と歩いているからこそ、そんな感慨に浸れるのかな？　――そんな自惚れも、思ってしまう。

よろしく会とやらは、話に聞く限りでは、学内政治の地盤固めという感じだし、さしもの小町もあまり気が抜けないだろう。要は、きたる新生活でスクールカースト上位の席をつかむための下地作りだ。なにそれ、外交官のパーティーかよ。鹿鳴館かよ。小町が明治時代風のドレスとか着たら、やっぱり似合いそうだよネ！　華族のお嬢様って感じで！　そういう社交がまったくダメだった俺は、そりゃボッチになる。そんな会行っても、ろくに喋れないだろうし。中学ボッチだった奴が、高校でいきなり人生逆転させてリア充になろうとか、そういう発想がまずもって夢物語でしかなかったと、今ならよく分かる。

て、ええい、今はそんな事を考えている時ではない。

どうでもいい暗黒時代の記憶を頭から追い払うべく、違う話題を振ることにする。
「で、どうだ。制服の感じに、ちっとは慣れたか？」
「ん。最初はごわっとしてたけど、歩き回ってて、ちょっと馴染んできたかも」
さもありなん。初めて袖を通す制服は、まだ固くて、ぎこちない。そんな感触もすぐに慣れて、やがて制服を着るという行為そのものが日常化して価値を失っていく。
馴染むというのは、つまりは特別性を失うということに過ぎない。
「そのうち嫌でも慣れる。今のうちにせいぜい新鮮な感覚を味わっておけ」
「はーい。でもその新鮮な制服デートの相手がお兄ちゃんって時点で、どーにも締まらないけどね」
「お前が服合わせろっったんだろ……」
本当にもう、ワガママなんだからっ☆。
しかしまあ、微笑ましい言い分ではあるのか。今頃、本当に恋人と制服デートとかしてる奴も、多分いるだろう。あるいは、よろしく会で出会って、相手を品定めに掛かってる奴とか。その点で、わが妹はしっかりしている。お兄ちゃん嬉しい！　大志とかの血で、ボクのこの手を汚さなくて済んだ。あと川崎に、犬と豚のように殺される未来も回避できた。言う事なしだな。
――でもそれでいいのか、という誰かの呟きが、胸の深いところから聞こえた気がした。
「なあ」
「ん？」
「本当に制服デートしてみたい男って、お前、いたりする？」
「ちょっと、やめてよね、こんな時まで」
本気でウザそうな顔をする妹に、しかし俺はなぜだか、言葉を続けてしまう。
「いや、その、勘違いすんな。別に、説教とか、監視とか、そういうつもりはないんだ。ただまあ……」

なんだろう。何を言いたい。何が言えるんだ。
「ただまあ、俺はお前の兄貴で――つまりもっと――お前の味方でいたいんだ、ってこと」
「なにそれ」
怒ったような声。やらかしちまったかな、と思い、ため息をつきたくなった。
「すまん。怒らせたいわけじゃなかったんだ」
返事は、すぐには返ってこなかった。
これが現実だ。十年以上を一緒に過ごした家族とすら、意思の疎通に苦労している。つまるところ、俺はボッチになるべくしてなった人間ということなのだろう。言葉にしたところで分かり合えないし、言葉にしなくても伝わるなんて、傲慢もいいところ。――海辺を洗い続けるさざ波のように、いつかの言葉は、いまも繰り返し、思考のひだに寄せては返す。
しばらく、無言で歩く。空気は重くて、モール内を流れるＢＧＭだけが陽気で春めいている。行きかう人々の笑い声や、はしゃぐ子供の叫びが、耳の穴を素通りしていく。会話もないまま、同じ学校の制服を着て、並んで歩く俺たちは、傍目にはどう映っているのだろう。
「……心配しなくても、小町はそのうち、すっごい素敵な彼氏さん作るから」
やがて小町が、俺に目を向けず、前だけを見たまま、口を開いた。
「イケメンで、優しくて、爽やかな感じの男の子とか、チョイ悪だけど頼りがいがありそうなセンパイとか、子犬系の幼馴染男子とか、そーいうのを」
「ん……、そうか」
なんか、そこらのゲームショップでワゴンセールしてる乙女ゲーとかに出てそうな顔ぶれだな。ていうか、『そーいうの』の方向がブレまくってるんですが、それは……。
「で、お兄ちゃんを悔し涙でひいひい泣かせてみせるよ」
「えげつねーな。少しは兄をいたわってくれ」
でも、それぐらいの方が、むしろ安心できるか。

「――――ってんの」
「ん？」
「なんでもない。キモいから、急にニタニタしないでよ。いつも以上に腐った笑いとか、やめてっ」
「お、おおう、すまん」
お前もさっき、それやってたけどね？　ていうか、いつも以上ってなんだよ。
あわてて口元を引き締めていると、小町がさらに言い募った。
「ね、お兄ちゃん、小町にお祝いしてよ。合格のお祝い」
「は？　いやなに、それ？」
お祝いとか、もう十分じゃないのん？　友達と旅行にも行ったし、先週は家族で焼肉も食いに行ったし――これ以上、何が必要だというのかね!?
「……しゃーねーな。あんま高い物とか、買ってやれねえぞ」
「分かってるよ。いつだって、小町は兄思いの妹ですから」
ツンとすました顔で、小町は俺の前に立って歩きだした。俺は頭の後ろを掻きながら、へいへいとぼやく。
分かってる。
いつだって、小町は俺には過ぎた妹だ。だって、こんなにも兄思いなんだから。
小町の先導で、モール内にある喫茶店に入る。内装は木目調のインテリアを中心にした、ややクラシック風味の店だ。椅子の座面にパステルな色が使われていて、そこそこライトかつお洒落感がある。価格もまあまあ良心的だ。窓際のボックス席に、２人で腰を落ち着けた。
「クリームソーダ一つください」
「えーっと、俺は……その、スフレパンケーキを」
かしこまりましたっ、と感じのいい営業スマイルを浮かべて、ウエイトレスさんが下がっていく。うーん、やっぱりプロって、ああいう人のことを言うんだよなぁ。俺も将来は、いつも笑顔で奥さんをコントロールする素敵な主夫を目指さなきゃ。なにそれヒモじゃん。
小町は向かいの席で頬杖をついて、窓の外に目をやった。

目元に落ちる、まつ毛の微かな影を見つめていると、本当に、いつの間にこんな顔が出来るようになったのだろうと、感慨とも戸惑いともつかない感情が湧いてくる。毎日、水を与えていた鉢植えに、ある朝、見たこともない花が咲いているところに遭遇したような。

もっとも、その横顔はどんなに美しくても、俺には妹の顔でしかない。

ただ、家族以外の奴にとっては、また別のものに見えるのだろう。

さっきは不用意に口にして機嫌を損ねてしまったが、いずれは、そういう話が出てくるだろう。誰かが小町に惹かれるのか、こいつが誰かに心を奪われるのか。当然ながら、面白くはない。――ないが、それが自然だし、ゆくゆくは小町の幸せにつながるなら、できる限り力になってやりたいな、とも思う。

らしくない、我ながら、鼻で笑ってしまうような思考。まあ大志は許さないし潰すけど。いや潰しちゃダメだろ。

「――なんていうかさ」

ややあって、少し疲れたような声音で、小町が切り出した。

「受験が終わって、高校に入ることが出来さえすれば、苦しいことは全部終わって、楽しい生活が待ってるんだと期待してた部分もあったんだけど」

「うん」

「やっぱり世の中、そんな簡単じゃないなって、思う日々なのです」

「あー、なんだ。お疲れさん、て言っとくべきか？」

「うん。だから今日くらいはお兄ちゃんにいっぱい労ってほしいなーって。友達とか友達予備軍の人たちとかじゃなくて、心を許せる人に目一杯、甘えたいなって。あ、これ小町的にポイント高い！」

にぱーッと八重歯をのぞかせて、小町があざとい笑みを浮かべた。くっ、この魅力に溢れつつも油断のならない小悪魔スマイルっ！　お兄ちゃん、マジで君の1年後が不安だよ。具体的には、なんとか色さんみたいになってないか不安だよ！

そこでふっと、肩から力が抜けた。

自然体を演じるということにも、それなりに意味はある。それは葉

山と戸部達から俺が学んだ、数少ないことの一つだった。
「……ありがとな」
「ほえっ!? な、なんでお兄ちゃんがお礼を言うの？　ここは小町の可愛さにクラクラしつつ、捻デレ気味に『ちっ、しゃーねーな』とか言うところじゃないの？」
「はは。ま、お前はよく出来た、自慢の妹だってことだ」
小町は俯いて、返事をしなかった。あれれぇ、また失敗したのかな、と思っているうちに「お待たせしましたぁっ」と注文の品が届けられる。
「ほんじゃまあ、合格、おめでとさん」
水のコップを、クリームソーダのグラスにカチンと合わせた。ソーダの中に浮かぶ氷が、からんと透明な音を立てて回る。
「ありがと」
言葉少なに礼を言い、小町はストローで緑色のジュースを啜り、微かに笑った。
「ん、おいしい」
「そか。良かった」
「合格祝いに、お兄ちゃんにクリームソーダを奢ってもらう――ふふ、なんかマンガか小説の話みたい」
笑顔でそう話す小町は、わが妹ながら綺麗で可愛くて、そして少し、物悲しそうだった。
現実では、マンガや小説みたいな綺麗な終わり方をすることは稀だ。ハッピーエンドを語る物語の多くは、『こうであればよかった』という願望を投影したものだと、いつから理解するようになったのか。
「――なんていうか、やっぱりね」
「おう」
「さっきも話したけど、高校生って、中学生に比べれば大人に近くなるわけじゃない」
「それは……いや、そうかもな」
「だからさ、もっとちゃんと――ちゃんとした大人になりたいなって、小町は思うのです」

「ちゃんとした大人、か」
呪文を復唱するように、無心にその言葉を繰り返す。
抽象的だが、俺たちのような年頃の人間にとっては、切実な願望だ。
大人になる。
単に背丈が伸びたり、体の発達が待ち遠しいというだけなら、そのまま時間の経過に身を任せていればいい。しかし、小町が望んでいるのはそんなものじゃない。『焦らなくていい』なんて偽善に満ちた言葉じゃ、まるで足りない。
けれど、俺には小町が満足するような指針は与えてやれない。けして長くはない高校での時間で、俺が知った事、教えられた事はある。しかし血の通っていない言葉に、何の価値があるというのか。
小町も、別に俺には期待してはいないのだろう。それ以上なにか言うこともなく、スプーンでアイスを掘り崩し、口に入れ、目を細める。
「ん～～、さいこうっ！　あ、でもでも、お兄ちゃんのパンケーキもおいしそう！　一口小町にめぐんでよぉっ。小町のアイスもあげるからさぁ！」
「へいへい」
可愛い妹のおねだりに、俺はどうにか笑顔で応えてやる。
大人になる。すべての子供にとって、等しく難しい命題だ。
でも。
子供だって、いや子供だからこそ、誰かを助けられるという事も、あるんじゃないか。
甘えられるのだって、悪くない。
……いやまったく。
俺も、いい加減、大人にならんとな。
いつまでも妹に頼ってちゃ、世話ないわ。
自嘲を隠しながら、俺は小町のさし出すスプーンにかぶりつく。アイスがとろんと舌の上で溶けて、バニラの香りが口の中に広がる。
甘くておいしい。
その甘さに、ちょっとだけ泣きそうになった。

3、4月／始業日

＊　＊　＊

「……だから、ゆきのんの気持ち、教えて」

決して、大きい声ではなかった。

囁くように、両手で包んでそっと差し出すように、静かに告げられた言葉。

それが夜の中にぽとんと落ちて、ゆったりと波を描いていく。

いつしか夜も更け、駅前からはすっかり人通りがなくなっていた。先刻までちらほら見かけていたスーツ姿の人々すら見かけなくなって、とても静か。だから彼女の言葉はよく透り、じんわりと耳に染みこんだ。

世界の終わりを告げる言葉――というには、少し優しすぎる声。

でも、間違いない。

いまなのだ。

いま、ここで、名前を付けなかった私たちの関係性は、一つの終わりを迎える。

名付けるとは、ラベルを張る行為だ。

可視化された概念の紐づけ。言葉にして、相手と互いに承認しあうことで、共通の認識と関係性を作り出す。

思えば私は、それが昔から嫌いだった。

他人と足並みを揃えること。相手の気持ちを慮ること。言葉による約束で、つまらない相手とつまらない取引を交わし、挙句に自分自身を縛ること――すべて、馬鹿げた行為だと軽蔑していた。

特に、トモダチという言葉は、あの時から、ずっとずっと、嫌いだった。

それまでずっと傍にいてくれた人さえ、一緒に嫌いになってしまうほど。

でも。

『……なあ雪ノ下。俺と』

――ごめんなさい、それは無理。

『つだぁ！　まだ最後まで言ってねえだろ』

文化祭が終わった直後の、あの他愛ない会話のときから、もしかして私は予見していたのだろうか。いつかこの瞬間が巡ってくると。

選択するということから、私は逃げていたのかもしれない。

夜風が吹いて、街路樹の葉がさらさらと音を立てる。なにかが崩れていくような――それを見送る者を、慰めているような――そんな音。

駅前の街灯を受けて、彼女の目は穏やかな光を湛えて私に向けられている。真っすぐで、でもとても優しいまなざし。いつも私を温め、勇気づけてくれた優しさ。私と彼を――ひねくれた人間たちの間を――いつも取り持ってくれたぬくもり。

唇がうごめいた。

一瞬、彼女のその優しに溺れて、このまま言ってしまおうかと――そんな思いがあふれかける。

息を吸う。

さらに深く深く、吸いこむ。

息吹はいつしか、深呼吸じみた深いものに変わる。

言葉を吐く代わりに、冬の名残の冷たい空気を肺いっぱいに満たす。冷たい水を一気に飲んだように、のぼせた体温が冷えていく。

彼女の優しさに、私はいつからか、少し甘えすぎていた。

認めよう。

私は弱い。居場所が欲しくて、誰かに受け入れられたくて、でも他人を求めたり、頼ったりということが、どうしようもなく下手だ。もしも自分を高めるのと同じくらい、他人を理解し、受け容れられる努力をしていれば、今頃はもう少し違った人間に成れていたのかもしれないけれど。

私の傍にいてくれたのは、彼と彼女だけ。私のような、どうしようもない人間に、自分から歩み寄ってくれたのは、この二人だけだ。

せめてこの宝物を傷つけることだけはしたくない。彼女の優しさに勇気づけられ、彼のひたむきさに救われた、これまでの日々を、ここまでの自分を、裏切りたくはない。

だから。
名前を付けることなく、なにものかに成ることを拒否したままの、私たちの関係。
それを、ここで。
私は彼女の目を見返し、唇を開き、そして――。
＊　＊　＊

週が明けた四月の一日の空は、薄曇りだった。
春先には多い空模様だ。桜の季節に特に多く、薄い日差しに花の淡色がよく映えるから、花曇りなんて呼び方もされる。
いまさら花を楽しむでもなく、ボーッとした頭で、俺は自転車を走らせた。
花見川沿いの通学路を進むうち、ぽつぽつとウチのブレザーを着た生徒の姿が増えてくる。彼らの多くは、二種類の人種に振り分けることが出来た。
顔が微かに上気していたり、声色が明るかったり――きたる新生活に興奮や期待を抱いている人間。
もう一方は、同じ笑顔でも、祭の終わりを予感したような、どこか寂しげな影がつきまとう側だ。大仰な話しぶりや笑い声にも、なにやら不安や緊張が滲み出ている気がする。
深く考えるまでもなく、その違いは推察できる。つまりは二年か三年かという違いだ。
たった一年。されど一年、か。
駐輪場に自転車を止め、カバンを手に昇降口に向かうと、玄関を入ってすぐの所に、山のような人だかりが出来ていた。クラスの振り分け表が、掲示板に張り出されているのだ。
歓声やら、落胆やら、悲喜こもごもの音声が、あちこちで弾けているが、俺には興味も関心もない。あ、いや戸塚の名前は探しちゃうな。やっぱ。
それでも、たいして時間をかけることでもない。掲示板の前には近づかずに、俺は遠目に、自分の名前を組分け表に求める。

理系クラスであるB、D、G組は、最初から候補から外れる。さらに文系でも特進クラスであるAは違うし、実質的に準特といっていいCもないだろう。成績には多少自信はあるが、内申は決していいとは言えないのが俺だからな。となれば、残りの候補はおのずと絞られる。えーと、は行、は行……。

しばし表を見つめ、ようやく自分の名前を見出す。そして俺は、肩を落としながら二階へ上がった。

神は残酷だ。二年の時には天使との邂逅を与えておきながら、翌年にはそれを奪うなんて。

二階の廊下もわいわいと喧騒に満ちている。

そこここで「やったー！　今年も一年よろしくね！」やら「うれしーっ！　またノート見せてねーっ！」「えぇ……」やら、喜びの挨拶が溢れている。あの男子生徒はあんま嬉しそうじゃないですね……。昔の俺なら「やれやれ系リア充かよ、けっ！」とか思ったところだが、本当に迷惑に感じてる奴もいるからな。あの女子生徒は、勉強の保険が欲しいだけなのか、遠回しなアプローチなのか知らんけど、もうちょっと相手の顔色を読み解く訓練をしようね……。

そんなやり取りを横目に見つつ、俺は自分の教室に入る。

三年F組。

奇しくも、去年と同じクラス番号だ。もちろんただの偶然で、それ以上の意味なんかない。物理的にも時間的にも、ここは去年とは違う教室だ。

黒板に張り出された席順に従って、中ほどの席に座る。机にぐでっと上半身を倒しつつ、周囲を観察――ぱっと見、知らない奴ばかりだ。名前の分かる顔はほとんど無いな……まあ、まだ教室に来ていないだけかもしれんが、今のところは。

ふうぅっと、細く長い息を吐きだした。そこに込められた感情が放心なのか、落胆なのか、安堵なのか、自分でもよく分からない。いや、安堵は妥当か。俺はいま、少しだけほっとしたのだ。きっと。

「おはよう」「うっす、おはようさん！　最後の年だけど、盛り上げていこうな！」

「はよーっ」「おっ、ゆっこー。へへ、同じクラスかぁ。今年一年、逃がさんからな～」「あははっ」
「おはよっ、最後の一年、よろしくね！」「え？　あ、ああ……うん、おはよっ！」
交わされる挨拶を聞き流しながら、俺は腕を枕に、寝たふりに入ろうとする。
このクラスでも、俺はきっと誰とも深く交わりはしない。今さらそんなものを求めるつもりもない。
既に、多くの事を間違えた。ちっとばかり、間違えすぎた。勉強代と呼ぶには、かなり高い代償も払った。いや、俺一人だけなら問題ない。問題は、周りの人間を巻き込んでしまったことだ。
きっともう、欲しがることさえ、許されてはいない。
――クリスマスの頃も、確かそんなことを考えていたっけ。今となっては、単に自分のことで不貞腐れていただけとよく分かる。自分が欲しがったもの、自分の力で成し遂げたものが、思っていたようなのじゃなくて、勝手に失望していただけだ。
思考が呼び水となり、記憶が連鎖する。
寒い冬の空気。夜のしじま。潮の香りに溶けていく煙草の煙。
――誰かを大切に思うということは、その人を傷つける覚悟をすることだよ。
フッと、息が漏れる。ふて寝のポーズのまま、制服の袖に、額を強く擦りつける。
もしも、覚悟もないまま傷つけてしまったなら。
きっとそれは、どうしようもない不誠実だ。見るに堪えない驕慢だ。俺がなにより嫌い、唾棄していた行為。かつて俺が受けた仕打ちと同じだ。
傷つけられるのは、まだいい。
『そちら側』に立っていられるのならば、俺はまだ自分自身を認めてやれる。
だが傷つける側に回るのは――比企谷八幡が『あちら側』に立つのは――あってはならなかった。無自覚な悪意で蹴落とされる痛みを、

俺は決して忘れない。世の中で毎日のように、どこかで誰かによって行われていて、みんな仕方ないと受け入れている、それ。当事者をいちいち憎んだところで何にもならず、だからこそ、個々の人間ではなく、その行為を、意思を、俺は決して許さない。そのはずだったのに。

なのに、今のこのザマは、どうだ。

つらつらと、ラチもない物思いが頭の中を巡る。

そんなものに溺れていたせいで、直前まで俺は気付けなかった。

「――比企谷くん」

耳慣れない呼びかけに、ぞわりと背筋が泡立った。

違和感。

既視感。

慣れ親しんだもの、確かに知っている筈のものが、そこにある。

だがこの異質な感じは。

「比企谷くん。起きてるよね？」

耳に届く声は、聞き覚えがあるものだった。

だが、一致しない。致命的に一致しないのだ。

顔を上げるのが怖くて、躊躇する。

しかし呼びかけられて、無視を続けるわけにもいかない。

鉄の扉を引き開けるような心持で、俺はゆっくりと顔を起こし、机の隣に視線を向けた。

あったのは、透明な微笑だった。

喜怒哀楽の偏りのない、静かな笑み。たわめられた唇には、こわばりもなくて、笑顔そのものに嘘は見つからない。

艶やかな黒髪が、教室に差し込む静かな光の下で、ふわりと揺れる。

「比企谷くん、おはよ」

「あ、ああ……その……おはようさん」

舌に鎖でも掛けられているように、言葉が回らない。言いたいこと、言うべきことはある――筈だ。山のように。

耳の端に、教室のどこかからの囁きを感じる。視界のすみには、こちらの様子を伺っている2人の女子の姿。この教室に去年のクラスメイトは多くないとはいえ、やはり目立ってしまう。カーストのトッ

プなのだから、当たり前だ。
「色々あったけど……元気だった？」
「あ、ああ、まあな」
「そか」
小さく、噛みしめるようにそう呟く。それから『彼女』は、もう手を触れられない思い出でも愛でるような目で、俺を見た。
「高校生活も最後の一年だね。最後までよろしくね」
「おう……」
ろくに会話になっていない。自分の振る舞いに、寒気がする。
ダメだ。何か、何か言わなければ。
「由比ヶ浜」
俺は、彼女の名を口にした。
「ん？」
黒髪の少女は、小首をかしげて、俺を見る。
その仕草は、自然にも見えたが、芝居がかっているようにも見えて、真意が掴めない。
さらりと波打つように揺れる髪に目がいき、そこで今さらのように、トレードマークだったお団子髪が解かれていることに気付いた。
ほんの一か月前とは、まるで印象が違う。
ピンク掛かった茶髪は、艶のある黒に変わり、お団子を解いたせいで、髪は肩を撫でるくらいのセミロングに変じている。
「その、ずいぶん変わったな。……なんていうか、印象が」
「あはは、よく言われる。朝からもうたいへん」
静かに笑う彼女の表情、そこから立ち昇る情感――不自然なようでいて、しかし単に無理をしているだけの〝りきみ〟とは違う、眩しい緊張のようなものが満ちている。うっかり直視し続けると、火傷をしてしまいそうな。間違いなく変わった筈なのに、これまでの由比ヶ浜としっかり地続きで繋がっているような、不思議な感覚だ。
「まあ、あたしも3年だしさ。そろそろ本腰入れて勉強しないと、来年どうなってるか分からないし」
「ああ……まあ、そうだな」

お前、マジで成績ヤバいもんな、と言うと、そうなんだよーと、軽快な笑いが返ってくる。まるで何事もなかったかのような彼女の声に、めまいを覚える。

俺は、どう振る舞うことを求められているのか。

俺の躊躇に気付かないのか、見透かしているのか、由比ヶ浜は自然な調子で続ける。

「今まではさ、みんなと遊んだり一緒に過ごすのが楽しくて……それが一番大切でさ、他の事とかあんま考えてなくて、でもそういうの、そろそろ見直さなきゃな、って思って」

「そう……か」

「うん。あたし、自分の楽しさに、目が眩んでたんだ」

脳みそに針を突き立てられたように、生暖かく、女々しい吐息が漏れた。

「由比ヶ浜、俺は……」

「ごめんね」

言葉の緒すら、断ち切られる。

謝罪というのは、何より強固なシャッターだ。

どんな言い訳も、慰めも、とりなしも、あらゆる調停のための努力も、たった四文字の言葉で弾かれてしまう。それ以上の先はない。非を認めたなら、その非礼を詫びたいというのなら、言われた方は、もう何も言えないではないか。

『お前に謝られる謂れはない』、『お前の謝罪なんか受けたくない』――俺はここで、そんな風に言うべきなのか。

「今まで、ごめんね」

「……なにがだ」

「それは、まあ、いろいろ」

はにかむように苦笑する。言葉を探すような沈黙の後で、由比ヶ浜は言った。

「でもまず、そうだね――ヒッキーなんて呼んじゃってて、ごめんね」

自分の表情が分からなかった。

俺は今、どんな顔をして、どんな声で、こいつと話しているのだろ

う。
「別に、今さらそんなことで――」
「だよね。今さら謝られてもって感じだよね。――それでも、ごめん」
彼女が謝罪を口にするたび、息が締め上げられていく。思い知る。これは清算だ。
糺すべきことを、彼女は糺そうとしている。それはどこまでも正しい筈で、けれど俺の方が、音を上げそうになっている。
「俺は、ホントに……」
「ううん、初対面でいきなり、一方的にあだ名で呼ぶなんて、ほんとは良くなかった。あの時ヒッ――比企谷くん、ちょっと嫌そうな顔してたし。でもあたし、ホントは上手く話せるか怖くて、自信なくて……だからああいう態度で誤魔化して、茶化しながら喋るしかなかったんだ」
それはもう、ずいぶん昔の事のような気がする。現実には、一年もたっていない、すぐそこの過去のことだ。
すぐそこでも過去だ。見えていても、もう触れられない。
「比企谷くんの優しさとか、か、かん――寛容さ?とかに、あたしずっと甘えていたから」
だから今までごめんね――。
言葉の残響が耳にこだましているうちに、話は終わっていた。
色々と言葉を交わしたはずなのに、席に戻る由比ヶ浜の後姿を見ながら、何を言ったか、よく覚えていない自分に気付く。
俺はまだ、今の自分の顔が分からなくて、今どんなツラをさげてるのかとか、ぼんやりとそんなことばかりを考えていた。

4、4月／始業日（夕刻）

ホワイトボードに、青マーカーの線が踊る。
ワックスのきいた床で軽快なステップを踏むように、キュキュッと小気味いい音を立てて、アンダーラインが矢継ぎ早に引かれる。
真新しい蛍光灯の下では、綺麗な楷書体で書かれた文字がよく見えた。それを指しながら解説する講師の少し疲れたような目元も、首元に結ばれたネクタイの、落ち着いた臙脂色も。
二年の夏から通っている学習塾は、総武高校とは反対の方向――幕張の中心街にある。設備は真新しく、照明も内装も白々と明るい。学校の教室の、もったりとした光とは段違いだ。塾が入っているテナントビル自体、まだまだ新しいから、当然ではあるのだけれど。
明瞭さ、清潔さは、ある種の緊張感にもなる。塾のそういう雰囲気が、俺は嫌いじゃなかった。普段ならば。
「何度も言うが、古文の基礎は活用を押さえておくことだ。それと文脈の把握。現代文と違って、主語や目的語が極端に省略されていることが珍しくない」
ノートに板書の内容を写しつつ、耳に入ってくる話は端のほうにメモする。その動作はなかば自動的で、内容は当然のごとく、頭に入ってこない。
本当は、集中しないといけないのは分かってる。
文系で学年第三位の実力ではあるが、俺も弱点がないわけじゃない。古文は比較的、苦手な領域だ。今のうちからコツコツと力をつけていかないと、後でヤバいことになる――その予感は、ある。
そもそも、スカラシップを受けられてはいるが、ここは本来タダじゃない。結構な額の授業料がかかるサービスだ。それを無駄にする訳にはいかない。
どんなにしんどい問題を抱え込んでいても、時間は流れていくし、現実の生活はなんとかやり過ごさなけりゃならない。そうしているうち、やがて日常という灰色のベールを何重にもかけられて、この時間は記憶の底にしまわれていくのだろう。それを嘆いても仕方ない。

感傷は、感情の余剰だ。そんな贅沢ができる余裕は、今の俺にはない。
あいつだって、だから――。
「――さて、ではこの段落の意味だが……比企谷、分かるか？」
「え、あ……」
唐突に名前を呼ばれ、目を白黒させる。講師の先生は、かったるそうな顔で俺を見ていた。
「十八ページの上段、真ん中の『いとおほけなき～』で始まる段落だ。分かるか？」
「あ、その」
教室内の十人ほどの学生の視線が集まるのを感じて、頬に血が這い上がってくるのを感じる。うぉぉっ、ボッチ歴ながいけど、このシチュだけは慣れないっ！　いつだって辛い！
「その、すみません、あまり集中できてませんでした……」
「もう少し、よく聞くように。――それでは、この『おほけなし』という語だが、二つの意味がある。一つは『恐れ多い』――」
解説を再開する先生から目を伏せ、少し呼吸を整える。
あー、心臓に悪い。ボッチ生活で人間強度を鍛えたといっても、本当の意味でメンタルが強くなったわけじゃない。こういう不意のプレッシャーはダメだ。くそ、あの先生、いつもやる気なさそうなのに、こっちが気を抜くと狙い澄ましたみたいに当ててくるな。ＦＰＳのスナイパーかよ。てかそれ、塾講師としては、けっこう有能ってことじゃね？
「――ん、では今日はこれまで。次回までの課題は忘れないように」
どうにか講義終了まで、粘り切る。
適当な課題を言いつけて、先生が出ていくと、学生たちも三々五々、教室から退出を始めた。それを見送りながら、少し席でグズグズする。
掻かなくていい恥を掻いてしまって、ちと座りが悪い。まあ俺の自業自得だけどさ。
教室から出ていく他の生徒の近くに寄るのが、恥ずかしい。クスクス笑いとかやられたら赤面ものだし、もしもチラとでも憐みの目を向

けられたら、今夜はベッドで七転八倒だ。
今日は最後に退出するとしよう。
そう思って席にとどまっていると、突然ちょいちょいと肩を突かれた。
はて、こんな可愛い幼馴染みたいな行動をとる奴が、この塾にいただろうか？
振り返ると、見知った顔がニコニコと笑顔を浮かべていた。
「はろはろー、奇遇だねぇ、ヒキタニくん。この塾だったんだ」
ああ、うん……見た目は可愛いヒロインですね。中身は女リッチみたいな人ですけど。リッチなの？　ならウチ、なんか奢ってほしいなぁ～。
「いや、なんでいるの……」
「ご挨拶だなぁ～。私だって受験生だよ。塾通いぐらいするよ」
赤い眼鏡のフレームを、くいっと指で押し上げて見せながら、彼女は答えた。
いや、そうだろうけどさ……先週までこの教室にいなかったじゃん。なんなの？　本当にゲームのモンスターみたいに湧いて出てきたワケ？　レアポップ？
俺のじっとりとした視線を受けて、彼女――海老名姫菜は、カラカラと笑った。
「あはは、まあマジメに言うと、春休みの講習に試しに出てみたら、なかなか良さげな感じだったからさ、今日から正式に通うことにしたわけ。うん、その判断は正しかったね」
面白いオモチャを見つけた子供みたいに笑うの、やめてくれないかな……俺をオモチャ扱いするのなんて、陽乃さん一人で十分――いや十分じゃねえよ。一人も要らないからね？　マジで。
つまり今日、最初からこの教室にいたのか。俺が気付かなかっただけで。
さすがに知り合いがいるのに見過ごすとか、ちょっと自分で自分が信じられなくなりそう。自分を信じたことなんて、中三の最後の告白以来、一度もないけどネ。

内心がモロに表情に出ていたのだろう。海老名さんは顔に笑みを残したまま、肩をすくめてみせた。
「そんなに嫌そうな顔しなくても、変なことなんかしないよ。ただ顔見知りがいた方が、なんとなく安心できるってだけだから」
「ああ……悪い、つい」
「ぐふっ、でもぉ～、それはそれとしてぇ、塾の講義中はヒキタニ君と一緒とか素敵だねぇ～。ヒキタニ君と三角関数とか、ヒキタニ君といまそかりとか、ヒキタニ君と長曾我部元親とか、色々楽しい想像できちゃうんだ～、ぐふふ腐っ」
だめだこいつ……早くなんとかしないと……。
相変わらずすぎて、鼻水も枯れる。数式やラ行変格活用と絡ませられたら……ハチマン、もうおかしくなっちゃうぅ！　てか最後のが具体的過ぎて特に嫌なんだけど。ゲームとかのイケメンイラスト見たら、リアルに想像してしまいそうだ……当分は長曾我部とか検索しないようにしよう。
「ま、ともあれ、学校に引き続いて、こっちでもしばらくの間、ヨロシクね」
「あ、ああ……まあ、よろしく……」
ぬぅう、嫌なことを思い出させる。
そう、クラス分けでも同じだったんだよな、この人。昼間は由比ヶ浜のインパクトで気が付いてなかっただけで――
そこで、思い付いた。
少しためらい、しかしすぐ、意を決して口火を切る。
「あのさ……」
「うん、結衣の事でしょ」
「知ったのは一昨日だよ。いつもみたいに3人で集まろうって話になって――で、待ち合わせ場所に来た結衣は、もうあの格好だった」
そこまで言ってから、海老名さんは手元のカップに、ストローを突き立てた。
いつまでも教室に居残っているわけにもいかなくて、場所を変え、駅近くのスタバ。

ガラス張りの大窓に面したカウンター席に腰を下ろし、俺たちは話を再開する。ささやかな情報料として、ここは出そうと思ったが、「そういうのいいよ」と、自分で呪文みたいな商品名をコールして、颯爽と席を取りに行った海老名さんは、改めて俺とは違う世界の住人だと思いました。

――「いらっしゃいませぇ、ご注文はお決まりでしょうかぁ？」

「あー、この、ロイヤル…アホ…フェ…？」

まあ柄にもなく、『らしい』注文をしようとしたのが良くなかった。注文の仕方よく分からないのに。いつも通り、最初からコーヒーって言えば良かったんだよ、うん。他人のペースに釣られると、ほんとロクな事ないよね。

そんなペースの主である海老名さんは、こういう場所にもしっかりと溶け込んでいるから流石だ。赤い眼鏡に清楚なショートヘア、押しの強くない、けれどすっきりと整った面立ちに、今は物思わしげな表情を浮かべて、窓の外の宵闇を見つめている。うっかりすると、店舗の広告写真みたいに見えてしまう絵図だ。

「私ら二人とも驚いたよ。前の電話とかでは、別に何も言ってなかったから。いつものお団子頭を探してたら、急に後ろからハキハキ話しかけられて、『え。誰？』って素で思っちゃった」

目の前の幹線道路を流れる光を目で追いながら、海老名さんはぽつぽつと続ける。その時の光景を瞳に蘇らせているように、視線はどこか虚ろだった。

「で、まあ――特に優美子がさ、すごい反応した。結衣を見るなり、『どーしたん、その頭っ!?』とかショッピングモールの入り口で叫んじゃって」

三浦なら、さもありなんという感じだ。でも往来で叫ぶとか、俺なら無言で距離をとるよ。ネタじゃなしに恥ずかしいもん。

ちょっとばかり、海老名さんに同情の視線を送ってしまうと、彼女はこっちを振り返って、ま、しゃーないよねという感じで、苦笑した。

「でまあ、それから色々と質問攻めにしたんだけど……いや、びっくりした。手強いのなんのって。なんか結衣、今までと全然違った。あの

優美子相手に、一歩も引かなくて」
「マジか……」
信じがたいような、でも不思議と、さもありなんとも思えてくるような。
一時期、由比ヶ浜は三浦に対してひどく遠慮――というより委縮したような態度をとっていた。それが奉仕部の影響もあって、より積極的に自分を出すように変わっていった訳だが――それでも、彼女たちの人間関係は、三浦が中心だったと思う。由比ヶ浜は皆をなだめたり、場の空気を取り持ったりといった、クッションの役割を果たすことが多く、それが彼女の定番のポジションだった。
人とぶつかったり、角突き合わせる姿なんて、うまく想像できない。
――比企谷くん、ごめんね。
わしわしと、乱雑に自分の髪を掻きまわす。そんな俺にかまわず、海老名さんは続ける。
「私も驚いたよ。優美子が『何があったん？』とか『誰かにひどい事されたん？　あーしに言ってみ？』とかなだめすかしても、『何でもない』って、きっぱり言い切るんだもん。あんなの見たことなかった。むしろ優美子の方が、ちょっと気圧されてたなぁ。なんていうか――」
言いかけて、しかし彼女はそこで黙ってしまい、また窓の外へと視線を向けた。
隣で俺も、無言のまま、夜の幕張を眺める。
薄暮の中、県道二六二号には、ヘッドライトを白々と剥いた車が、せわしなく行きかっている。街灯の下を歩く人の恰好は、メッセが近いからか、スーツ姿が多い。四月という季節柄、まだ黒を基調としたコートも目立つが、白系のスプリングコートや、薄手のスカートも混じり、どっちつかずな印象を残していく。この時期は過渡期だ。そして過渡期というのは、はたから見れば、いろいろ中途半端で、みっともなく映る。たとえ当人たちがどれだけ真面目で精一杯でも。
見てくれなんて、だから気にしてもしょうがない。必死でやってる本人からすればどうでもいい事だ。

黒い髪の由比ヶ浜結衣も、そういった過渡期の一つなのかもしれない。朝は、殴り付けられたような衝撃で、まともに見る事が出来なかった。けれど、あの由比ヶ浜の姿は、むしろ俺には――。

とりとめのない物思いを流すように、トールサイズのマグを傾けて、自分の喉を湿らせる。

お、うまいなこれ。

さすがスタバというべきか。普通のコーヒーだけど、なかなか美味い。ミルクに砂糖、蜂蜜と、いろいろ入れまくって大甘に仕立てたけど、コーヒーそのものも、なかなか良い味してんじゃねえの、これ？

お手製カフェオレの味に満悦していると、海老名さんも音を立てずに、なんとかフラペチを一口啜る。

２人して、ほぅっと息をついた。

「――どんなふうに言ってたんだ、由比ヶ浜は？　その、問い詰められて」

「んー、言葉自体はよくある内容だったな。『勉強に集中したい』、『もう三年だから』、『オトナにならなきゃ』――とか」

今までの結衣からは考えられないセリフよね――ささやかな笑い混じりに、海老名さんは言った。

「もう三年、もうオトナ……か」

聞いた話をまとめ、思考を巡らせる。万華鏡を回したように、脳裏には様々な言葉が立ち現われ、しかし端から四散して、方々へと散っていく。

わずかに残ったのは、一つだけ。

最近、同じキーワードを耳にしたばかりだ。俺の周りだけで、熱のない流行り病として流行しているのだろうか。

――ちょっとずつ、色んなものを諦めて、そうやって大人になっていくんだよ。

笑うような、嘆くような声が、呪いのようにひとりでに耳に蘇る。

ああそれと、と海老名さんが口を開いた。

「当分ヒキタニ君は、優美子には近寄らない方がいいかもね」

「うへぇ、やっぱそうなるか」

まあ状況的に、俺が由比ヶ浜に何かやらかしたのは誰でも分かるしなぁ…。
重い気を揉んでいると、海老名さんは、さらりと俺に流し目をくれた。
「ま、いろいろと難しいだろうけど――あんまり気張らず、ほどほどに頑張ったらいいんじゃない？　じたばたしても、どうにもならない時は、どうにもならないんだし」
言って、ストローを咥えて、飲み物を片付けに掛かる。投げやりなような、気遣うような、微妙な態度だ。慰めるような、突き放すような――あきらめるような。
そんな響きが、あまり面白くなくて、けれどその、小さな苛立ちを吐き出すこともできず、俺は代わりに、言うべきことを言っておく。
「すまん…いろいろ助かるわ」
「お礼には及ばないよ。私も結局、野次馬根性で見てるだけだしね」
言って、かすかな笑みを浮かべる。
あまりいい笑いじゃない。レンズの向こうの瞳が、待機モードに入って輝度を落としたパソコン画面みたいに、翳る。
海の底の瞳。
たびたび彼女は口にしている。私、腐ってるから。
その言葉の正確な意味も、起因も、俺は知らないし、あえて知りたいとも思わない。それは彼女に踏み込んでいく、他の人間がやるべきことだと思っている。
ただ、なんとなく。
いまこの時は、それに見て見ぬふりをするのが億劫になった。海老名さんの態度に、少し苛立ちを覚えたせいだろうか。あるいは友達のはずの由比ヶ浜に向けた『野次馬根性』という言葉に反発を覚えたせいだろうか。
「……海老名さんは、俺に対して含むところ、ないんだな」
「ん。もちろんだけど、どうして？」
「『わりと気に入ってる、なくすのは惜しい』……そんなふうに言ってたろ」

あの秋の日、京都駅の屋上で、彼女は確かに、そんな事を口にした。
たとえ口から吐き出す言葉の、ほとんどが嘘であろうとも――いやむしろ、そうであるならばこそ――本当に大切なことには、嘘を被せない。それは、俺たちのような人間が、本能的に守っている一線だ。むろん海老名さんが、俺と同じように考えているとは限らないが、この一事については、確信に近いものがある。
「なんつーか、俺は、間接的にせよ――」
「別に、君が気に病むことじゃないと思うよ?」
一オクターブほど、声が低まる。
空調の聞いた店内に、どこからか隙間風が吹き込み、耳に飛び込んできたような感覚。場合によっては、戸部が直面していたのは、こういう顔だったのだろうか。
「いいよ。私もちょっとだけ、本音で話そうか」
そう言って、海老名さんはあの瞳のまま、体ごと俺に向き直る。黒髪がさらりと揺れて、シャンプーのものか幽かに良い香りが漂い、こんな時だというのに、テンポの早まる自分の心臓に、少し嫌気がした。
「あの時、惜しいって言ったのは本当だよ」
でも、と平坦な声が続く。
「いつまでも続かないかも――て事も、そりゃまあ、予想はしてた。ヒキタニくんのおっしゃるとおり」
棘を含んだ声音に、俺は微かに眉をしかめながら、それを受けて立つ。
「まあ、やっぱ考えるよな」
「うん、いつか戸部くんや優美子あたりから、綻びがくるかもとは思ってた。出来れば、女の子同士の繋がりは残せたらいいなとは思ってたけど」
やはり、俺が分かっている程度の事は、海老名さんは先刻承知していた。
「で、私は腐った人間だから」
眼鏡の奥の瞳が、細くなる。
「いつかは終わるとしても、なるべく、一瞬でもいいから長く捕まえて

いたかった。それも嘘じゃない」
　そして。
「もう一つ。私、自分がそれを終わらせる原因にはなりたくなかった。私がきっかけになって、居心地のいい場所が崩れていくのは、ちょっと嫌だった。誰か他の人、他の要因のせいであってほしかった」
　あとは分かるよね、と、投げて寄越すように言う。
　返答の言葉に迷い、押し黙った。マグを手に取り、いつの間にか、もうそれがカラであることに気付く。
　沈黙が落ちる。チクチクと掌に刺さるような、両手で持て余してしまいそうな、刺々しい数秒が続く。
　やがて「まあでも」と、海老名さんが声音を変えて言った。
「あの時は、ヒキタニくんがあそこまでやってくれるとは思ってなかった。戸部くんに、『絶対無理だからやめとけ』とか言ってくれればなって程度に思ってたけど」
　別に、最初から君にスケープゴートになってもらうつもりはなかったんだよ――呟く声は、さっきよりは淡々としていた。
「ああ、別にそれはいい。俺が勝手にやったことだからな」
「それにしても、文字通りの出血大サービスだったよね。あれはマジで助かった。だからね」
　言って、海老名さんは、微笑みに似たものを顔に浮かべた。
「私、結衣や優美子には、友達としての義理がある。君には、あの時の借りがある。だから君らの問題については、特定の誰かの肩を持ったりしない……そういう事で、この話は手打ちにしない？」
　中立宣言か。いかにもこの人らしい、この人好みの提案だ。でも俺も、それで異存はなかった。
「ああ。それでいい」
「良かった」
　目元だけで少しばかりの好意を示してから、海老名さんは居住まいをただす。それから窓の外に視線を戻しながら、ぽつりと呟いた。
「にしても、今の結衣は、ちょっとすごいね。こういうのは、正直予想してなかった」

――いいよ。
まるで、気に入ったアーティストのアルバムについて語るような口ぶりだった。
「優美子やヒキタニくんには、今の結衣の姿って、不本意で痛々しいのかもしれないけど、私の感想は逆。すごいよ、いいよって言ってあげたい」
ちょっとねたましいなって、思っちゃうくらい。
そう口にする彼女の表情を直視したくなくて、俺もそっと、幕張の夜に目を戻す。
確かに、今の由比ヶ浜の姿は痛々しいかもしれない。俺も思うところがないわけじゃない。
けれどそれ以上に、別の衝撃を受けていた。海老名さんとの会話で、今さら気付かされた。
きっと由比ヶ浜結衣は、一歩、先に進んだのだ。俺がグズグズと、目玉と一緒に根性まで腐らせている間に。
俺が感じているのは、痛ましさだけじゃない。腹の底に居座っているのは、もっと卑しくてみっともない感情だ。子供の頃、風邪をひいて休んだ日、静かな昼間に一人ベッドで横になった時のあの気持ち――ああ、笑ってしまうような感情だ。
俺は、置いて行かれたような気になっている。
なにを勝手なことを。
変わらないと。上辺だけの成長や変化なんか認めないと言って、でも失いたくなくて、あの部室に本物を求めて――その挙句、欺瞞と打算と、優柔不断に陥ったのは、どこの誰だ？　その結果、どうなった？
答えはひどくシンプルだ。俺たちはバラバラになった。本物を求めた筈の俺は、自分たちで拠り所を壊して、離れ離れになってしまった。自業自得。それ以外の何物でもない。
――それでも。
バカバカしい事に、こんなザマになってなお、俺は、あの時間をただの欺瞞とは呼びたくなかった。無意味な馴れ合いでしかなかった

とは、死んでも認めたくない。何度思い返してみても、あの部室で過ごした時間は、記憶の中で、穏やかなパステル調の色彩とともに思い出される。破綻の痛みも、後悔の苦味も、あの眺めを灰色の過去に貶めることは出来なかった。

だから、誇るべきことの筈だ。心からの願いと挑戦の結果であるのならば、たとえ悲しく苦しい結末であったとしても、俺はこの結果を、今の由比ヶ浜を、誇りをもって受け入れていい筈だった。

こんなだから。

つくづく、比企谷八幡は、救えない。

Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ……（結衣）

「――あははっ！　マジ？　優美子ってば、凄すぎだよ」
『笑うなしっ！　あいつらが悪いんじゃん、影に隠れてネチネチやってばっかでさ』
　思わず笑い声を立てると、スマートフォンの向こうで、うがーっと不機嫌なぼやきが加速する。
『だいたい、やり方がしょーワル過ぎ！　教室の隅で固まって、聞こえよがしに前のことブチブチ言うとか、マジでウザすぎ。ありえない』
「そりゃそうだけど。ふふっ、新しいクラスでも、もうボスっていうか、お母さんみたいな感じになってるね」
『ちょ、おかーさんとか言うなし！　あーしはただ、陰湿でネチネチしたのが嫌いなだけだっつーの！』
　電話口の声は、ぷくーって音が聞こえてきそうなくらい、ふくれっツラをしてるけれど、語尾の響きはどこか優しげで、あたしはすごく安心する。優美子と同じクラスになれた人たちは、幸せだ。この子がいるクラスなら、あんまりひどいイジメみたいなのとか、起きにくいだろうから。
　そんなふうに思って、けれどすぐに、去年の秋頃の光景が、胸の奥からポコッと浮かんできた。教室で独り、自分の席で丸くなっていたあの人の背中が思い出されて、顔の筋肉から笑いが消えていくのを自覚する。
　記憶って、厄介なお邪魔虫だ。ときどき不意打ち気味に、嫌な過去がクルっと戻ってきて、通り過ぎざまに頬をはたいていく。優美子の話に出てきたあの子は可哀そうだと思うけど、なにもイジメっ子だけが意地悪をするわけじゃない。
『……結衣？』
「あ、ごめんごめん。新学期の初日で疲れたのかな？　ちょっとぼーっとしちゃった」
『……ねえ結衣、あーし、あんたの事情にあんまり首を突っ込むのも悪いとは思ってるけどさ……あんまり酷いようなら、さ』

「大丈夫だよ。優美子が思ってるみたいな事じゃないから」
そうだ。これは、それ以前の話。
もしもこの話で悪い人間がいるとしたら、それはきっと、あたしだ。
『……ま、結衣がそう言うんなら、今はそういうことにしとくよ』
「うん、ありがとね」
そう言った直後、スマホがメールの着信を告げる音を鳴らした。
なんだろ、と思う。友達からの連絡なら、大抵ＬＩＮＥだし。もしかして迷惑メール？
『じゃ、そろそろあーし、風呂入ってくっから。おやす』
「お休み、また学校でね」
通話を終え、ふぅっと息を吐く。相変わらず、優美子とのお喋りは楽しいけれど、こないだ会ってから、ちょっとだけ、間に緊張感が籠るようになった。仕方ない事ではあるけれど、やっぱりちょっとだけ、キツいかなって思っちゃう時もあるし、寂しいし――ああ、弱気になるな、あたし。自分で始めたことなんだから。
「……さてと、えーっと――姫菜？」
メールを確認すると、差出人は、もう一人の友人だった。もちろん友達は他にもいるけれど、あたしにとって本当に親しい間柄というのは、そう何人もいない。
けれど珍しい。普段のやり取りなら、それこそＬＩＮＥで済ませているのに。長い話なのかな？
メールを開いてみる。《はろはろー》と可愛いデコ文字付きの挨拶が目に入り、クスっと笑いが漏れた。指先でスクロールさせると、この数日の出来事についての話が流れていく。昨日、中野のなんとかっていうマンガのお店に行ったけど良い物がなかった。今朝のお弁当の卵焼きは自分でも会心の出来だった。今日から新しい塾に行き始めた――。
《そうそう、そこでね、なんとヒキタニくんと一緒だったんだよー！》。
その一文が目に入り、指が止まった。
《偶然、同じ塾だったんだよ。もー奇遇すぎて、ハヤハチ妄想が止まらなくて、授業中はｙ馬ましでしたよぐへへｈ》

いつもの調子の文章が続いて、ちょっと気が抜ける。というか、そこで彼についての言及は終わっていた。――うん、五行ぐらいに渡って隼人くんやとべっちとの、その、アレな想像を書き殴ってるのは、無視しちゃっていいよね……。

スマホを机の上において、ちょっと目を閉じる。色んな思いが頭の中をぐるぐる回る。

姫菜がわざわざメールでこの事を知らせてきたのに、ちょっとだけ、モヤッとしてしまう。あ、でもホッとしてもいるのかも。リアルタイムでこの話をやり取りしてたら、きっと言葉に詰まってただろうから。ああ、ＬＩＮＥを使わなかったのは、だからなのかな。

気遣いなのか何なのか、よく分からない友人の振る舞いに、小さいため息が漏れる。頭が良くて、お洒落で、なんかヘンな趣味を持って――それがあたしの知る海老名姫菜だけど、それだけじゃないのも、まあなんとなく――女子なら当然のように――分かっている。いや、最近になって分かり始めたというべきかな。

きっかけは修学旅行――あたしにとってひどく痛くて苦しくて、でもだからこそ、ある意味でとても大切な思い出。

あたしたちの転機になった出来事だけど、あれ以来、あたしは姫菜の事も注意して見るようになったと思う。あの後の姫菜の様子に、ちょっと違和感を覚えるようになったから。

時々、ほんとにたまに、とべっちとの間の空気が、凍ったみたいに固くなったり。あたしやヒッキーを見る目に、なにか不思議な靄みたいなのが見え隠れするようになったり。悪い感情を向けられているわけじゃないけど――なんだろう、あの目は。なにか落ち着かない気持ちになる。

目を開いて、もう一度、スマホを手に取る。

ヒッキーと会ったんなら、あたしの話もしたのかな。どんな言葉が飛び出したのか――想像するのが怖い。あの人があたしを、どんな風に評したのか。朝のやり取りを思い出して、動悸が速くなる。ああ、本当に、普段は想像力が足りないのに、余計なことを考える時だけ、あたしの頭は勝手に走り出す。自分の想像に、先回りされて傷つけられ

そうになって、反射的に胸元を押さえた。
バカみたい。自分勝手にもほどがある。全部、全部あたしのせいなのに。
大切なものを台無しにしてしまって、それでもまだ、日々は続いていく。あたしは明日も学校に行かなきゃいけない。いずれは受験だってしなきゃいけない。この日々の向こうに希望があるのかは分からない。もしかしたら無いのかも。
もしかしたら、なんて。
そんな言葉を期待するのも、もう難しいのかな。
もしも、もしも一つだけ、願いが叶うなら。
せめて、もう一度。
それはきっと、あまりに頼りなくて、儚くて——希望というよりも、ただの夢でしかないけれど。
ただの夢でも、日々を生きていく助けになるのなら、あたしはそのために頑張れる。
だから、もっとちゃんとしないと。
もっと、踏ん張らないと。
目を閉じる。今度は意識を集中させる。
真っ暗な視界に、優美子とも姫菜とも違う、もう一人の友達の姿を思い起こす。
約束は、まだ生きている。はず。
——よし。
それじゃ、まず返信だ。なんて言って、姫菜に訊いてみよう。
すんっと勝手に鳴りだした鼻を擦りながら、あたしはメールの文面を考え始めた。

5、4月／入学式（1）

＊　＊　＊

「友達よ」

臓腑を吐き出すようにして、その言葉を口からひねり出した。

言った瞬間、自分が二人に分裂したような、奇妙な感覚に襲われる。生身の肉体――熱く脈打つ臓物を抱えた自分の上に、もう一人、大脳新皮質から理性だけをはぎ取った、冷たい観察者がふわりと浮き上がるような。

己の上澄み――観察者が、ヒュゥッと肉体の耳元に息を吹きかける。靴底で霜を潰すような、冷ややかな声音。

――信じてもいない言葉を、よくもぬけぬけと。

「……本当に？」

幻影の言葉に同調するように、目の前の彼女が、そっと尋ねてくる。咎めるような調子じゃない。こちらを気遣うような、でも妥協することなく、真摯に覗き込んでくるような、真っすぐな視線。

益体もない思い付きが、ふと胸をよぎる。

もしも――もしも私が男性として生まれついていたら、きっとこういう人を好きになっていたのだろう。優しくて真っすぐで、素直なのに芯は強い。そうして、必要な時には相手にそっと寄り添ってくれる。男性のみならず、同性の私から見ても魅力的で、こうして一緒の空気を吸っているだけで胸の奥が暖かく溶けていくような――出来すぎた人。

きっと、彼女にこそふさわしい場所がある。願いに一番近い席。幸福の在りか。

私たちは長く同じテーブルを共有していきたけれど、これから座る席は順番があり、しかも有限だ。

選ぶべきもの、選ばれるべき人。

私は理解している。責任と資格について。

だから、私は選ぶ。

「ええ、本当よ」
背後の幻影に、キチッとひびが走る音が聞こえた。生身の内臓がお腹の底で脈打ち、炎のように熱い血を吐き出す。
街灯の光を受ける彼女の瞳に、夜露を結んだような潤いが宿った。わななく唇が盛り上がり、何かを言いたげに半開きに開かれて、また閉じる。少しして、彼女がもう一度、唇を開いた。
「……そう、なんだ」
「ええ、そうよ」
りきむこともなく、穏やかな声で、告げることができた。だからこれは嘘じゃない。
決意だ。
「それじゃあさ……じゃあ、さ」
「きっと叶うわ。あなたのお願いも、私のお願いも」
敗者はいない。三人仲良く手をつないで、みんな揃ってゴールイン。
――そんな謳い文句でゴールテープを両隣と一緒に切ったのは、幼稚園の頃――たしか、近所の自然公園でのオリエンテーリングかなにかの時だったろうか。あの頃そばにいた人たちは、いまはもう誰もいない。傷つくことを知らず、綺麗で無力な掌をしていた時だけ、握ることが出来た夢。
懐かしむでも、憐れむでもなく、ただそれを思い出した。
学生時代の最後の思い出だとすれば、こんな締めくくりも悪くない。いや、雪ノ下雪乃という人間にしては、むしろ上出来の部類ではないか。
学生時代。十代。私がまだ『子供』だと名乗れる時間の、ここが最後。
「ゆきのん……」
身を引くようにして、彼女が姿勢を変える。天に祈るように、壊れそうな何かを抱きしめようとするように、胸の前で両手を重ね、濡れた視線をこちらを送る。
「大丈夫よ、なにも不安がることなんてない」

「ゆきのんは、本当に、それで……」
「ええ」
彼女の瞼が震える。たわめられた唇から、微かな囁きが漏れて、夜に溶けていく。
――ぜんぶだよ。わたしが欲しいのは、ぜんぶなんだよ。
「ゆきのんの全部、私のぜんぶ、ヒッキーにとってのぜんぶ――それって」
「由比ヶ浜さん」
彼女を制して、私は口を開いていた。自分で少し驚く。彼女の言葉を遮ってまで、私は何を言いたいのだろう。いまこの局面で、こんなことをする必要など、どこにもないのに。
「あ、うん――」
彼女の顔に、微かに不安が浮かんだ。
唇を湿らせる。
「私たち、ずっと友達でいましょうね」

＊　＊　＊

火曜日。
入学式の朝は、昨日に引き続き、薄曇りだった。別に空模様で人生は変わらないが、爽やかな青空が拝みたい気分でもなかったので、まあ満足するとしておこう。
小町は、今日だけは俺と一緒に行きたくないらしく、早々に行ってしまった。仕方なしに一人で身支度を整え、朝食を掻きこむ。自分で準備するぶん時間が掛かったが、無言の食事はすぐに済んで、鍵を閉めて家を出たのは、いつもとあまり変わらない時刻だった。
川沿いの通学路に出ると、まだまだ新学期の興奮冷めやらない生徒たちの姿が目立った。あちこちで笑い声や、甲高い叫びが上がっている。入学式があるからか、むしろ今日の方が活気が強い。
道々で目立つのは、やはり新入生の姿だ。昨日の二年と三年の違い以上に、すぐに見分けがついた。なんせ物理的に顔が違う。犬の子供

みたいにまだまだ丸っこくて、あどけないとさえ感じる。見てるだけなら可愛らしいが、俺が中学の時に、まさにああいう奴らから色々な体験をプレゼントされたわけで、まあ見かけに騙されちゃダメだよな。子供は天使なんかじゃない。この世に天使はただ一柱、常にトツカエルさまだけなのだ。

大声で「おめよろ」挨拶を交わす幸せそうな連中の横をスゥーっと通り過ぎ、何事もなく学校までたどり着く。昇降口で、先生と何人かの生徒が新入生を案内している光景が、ちょっと新鮮だ。

「おはようございまーすっ！　みなさん、ご入学おめでとうございまぁーすっ！」

活き活きと弾むソプラノに、足を止めた。

晴れやかな挨拶が飛んでくるたび、通りかかった生徒たちの六割ほどが、目を見開いて立ち止まっている――おもに男子が。

会長さまは、今日もあざとオーラ全開で、昇降口前に陣取っていた。花曇りの空の下に映える、微かに着崩した制服と桜色のカーディガン。薄っすらと照り差す日を受けて、亜麻色の髪が早春の花のように淡く映えている。腕に巻かれた生徒会の黒腕章は、実務的で色気もない代物だが、今この場ではポイントもののアクセサリ――もっとはっきり言えば萌えアイテムみたいなものだ。属性付与で本人の可愛らしさを引き立てる役にしかたっていない。隣には若手の先生もいて、玄関奥のクラス表を確認するよう、大声できびきび指示を伝えているのだが……当然のごとく、生徒たちの目線は生徒会長の方に集中している。

うーむ、予想通りというか、さすがというべきか……新入生の男子たちに甚大な被害が出るだろうとは思ったが、それにしてもあのボーイ・ジャグラーっぷりはどうだ。さっきからいちいち足を止めて、熱っぽい視線を向ける奴が、そこにも、ほら、あそこにも。一色の方も、目が合うとにっこり微笑んだり手を振ったりするもんだから、昨日までウブな中坊やってた新入生どもはひとたまりもない。街中でアイドル声優にでも出くわしたみたいに、耳まで真っ赤になったり、デレレっと笑み崩れたり――。

ヤバイ。大惨事の予感がする。
俺、つくづく今年の新入生じゃなくて良かった――まああの小悪魔会長を爆誕させちゃったの、俺なんですけどネ！　てへ☆。
とはいえ、これが男どもの黒歴史増産だけで終わればいいが、あんまり酷い事態になれば、あいつ自身や生徒会にとっても有害かもしれない。もちろん一色は男子の操縦なんざ手慣れてるんだろうが、そもそも、それで女子たちに嫌われたのがすべての発端だし。なんかあいつ、脇が甘いんだよね……。
そんなことを思いながら、少し離れてぼーっと人垣を眺める。と、一色がこちらに気付いた。まん丸に見開かれた瞳がこちらに飛び込んでくる。俺もどう返したものやら分からず、互いにしばし固まるが、やがて気を取り直したのか、一色はフッと不敵な笑みを浮かべた。なに、いまのどういう意味よ？
「おほん……おっはようございまーすっ！」
何事もなかったかのように、威勢のよい挨拶が再開される。が、時々こちらに、チラッ、チラッ、と得意げに流し目。なにこっちチラチラ見てんだよ……まじめにやれ、まじめに。
「苦しい受験を乗り越えて、ついに今日のこの日を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げますっ！　まだまだ興奮冷めやらぬでしょうが、この喜びを是非みんなで分かち合いましょう！　な・の・で、入学式には遅れないでくださいねぇ～。靴箱には名前が貼ってあるから、よぉく見て、間違えないようにしてくださぁい。あと、奥のクラス表で、自分のクラスの場所を確認してくださいねぇ♪」
声の調子が、さらに一段階甘やかさを増して、耳に絡みついてくる。すると、ポーッと見とれる者もあり、ニマニマと相好を崩しつつ、言われたとおり昇降口へ歩き出す者あり――こうかは、ばつぐんだ！
ていうか、やりすぎだ。
なるべく目立たない立ち位置から、そっと身振り手振りでジェスチャーを送ってみる。『オイ、イッシキ』――すかさずドヤ顔カメラ目線。だからなんでそんな勝ち誇ったような雰囲気なんだよ……『アンマリ、チョウシノルナヨ』……っと。人前で目立つようなことはした

くないが、可愛い後輩のため、背に腹は代えられまい。
俺・決死のジェスチャーは、しかし、いまいち通じていないみたいで、一色は変わらずドヤ・フェイス。パチっとウィンクまで決めてくる始末で、流れ弾に当たった下級生が、視界の隅にまた一人。うーん、いろはす可愛い！　抜けててアホなところが、特にカワイイ！
……もう一回やるか？　あんまり目立つことしたくないんだけど……と思っていると、一色は隣の先生になにか断ってから、ちょいちょい、とこっちに向かって手招きして、校舎の隅に歩いて行った。
後を追いかけて校舎の物陰まで行く。家庭科室わきの角を曲がってみると、ふんすっと胸を張った会長さまがお出迎えだ。なにを自慢しているつもりなんだ。
「どーでした先輩？　新入生を可愛らしくも頼もしく案内する、可愛い生徒会長の晴れ姿。思わず見惚れてたんじゃないですか？　あ、でもでもすいません、あんまり先輩みたいな目の濁った人からマジマジ見詰められてたら通報されちゃいそうなので、そういうのは周りに人がいない時でお願いします、ごめんなさい」
「うん、なんか久しぶりだね、お前のそれ」
不覚にも懐かしいとか思っちゃったぞ。周りに人がいない時なら凝視していいって？　冗談にしても変な言い草だ。
とはいえ、さっきの仕事ぶりはなかなか悪くなかったとは思う――テンプテーション地獄みたいな部分さえ除けば。
なにごとも否定から入るのは良くない。貶すばかりでは、相手に悪意だけが伝わってしまい、信用されなくなる。とある少年がコンビニバイトで出くわした茶髪チーフは、口を開くたびの第一声が、ダウナーなトーンでの「チッ――あのさぁ～」だった。結局最後まで彼の態度は改善されることなく、その少年が最終的にバックレ＋制服着払い＋辞表同封のコンボを決めたのも仕方ないことであろう。俺としては、一色との関係をそこまで冷えたものにしたいわけでもないので、まず評価すべきところは、ちゃんとしてやろう。
「まあ、なかなかサマになってると思ったぞ。堂々としてたし。新年度の仕事はじめとしては、悪くない出だしなんじゃね？　生徒会長ど

の」
「――っ、お、おお……」
　唖然と固まったと思ったら、一色は何かを追っ払うように、わたわたと両手を振り回しだした。
「せ、先輩が私をストレートに褒めるとか、どういう風の吹きまわしです？　ちょっと気持ち悪いです。なに企んでるんですか？」
「お前な……上級生からのねぎらいなんぞ、素直に受けておけよ」
「や、だって人を持ち上げるのなんて、なんか下心がある時に決まってるじゃないですか。男子のアプローチとか単純すぎて、哀れだなぁって思うまでありますけど」
　辛辣ぅ！　てか無自覚のうちに人の黒歴史攻撃すんのやめようね！
「お前も大概だよね、そういうとこ……まあその意見自体は否定しないけどよ」
「ですよね、ですよね。あ、もしかして、とうとう先輩も私の魅力に当てられすぎて、下心が表面に出てきたとか？　なら口説くのはムードを選んでくださいごめんなさい」
　なんでちょっと嬉しそうな顔なんだよ。まだ俺に優位を取りたいのだろうか。いろはすったら、ブレないんだからっ。
「この程度の褒め言葉で口説いたうちにはいるんなら、俺の中学時代、もうちょっと色々あったろうな……」
　実際には『放課後一人掃除の刑』だ。モテるどころか、モテあそばれてる。ボッチこそ、安い言葉で釣られてしまう生き物だしな。誰か、僕のこともっと褒めてよ！　優しくしてよぉ！
　俺の内心の苦悩を読み取っているように、なぜか笑みを深めながら、一色はおとがいに指を当ててみせた。
「まあ確かに、エサの撒き方としては中途半端ではありますよね。私としては、もっとこう徹底的に、ターゲットが窒息して、その人のこと以外は考えられなくなるくらい、ご褒美漬けにしてくれる方が好みです」
　乙女ゲー的な発想ですね。目の腐った王子さまとか需要あるのか

しらん。当然ながら俺は王子でもなんでもないので、苦言を呈しておくことも忘れない。
「……まあいいよ。ただな、新入生の男子とか、昨日までウブな中学生やってたような連中だぞ。あんま弄ぶなよ。やりすぎると下級生の女子からも評判悪くなるぞ」
「あははっ、あれぐらい大丈夫ですよ。変に気を持たせるようなことしなけりゃ、舞い上がってる男子の方が笑われて終わりですから」
「おいバっ――やめろ、そういうこと言うの！」
マジでやめてくんねえかな、いちいちカサブタをほじくり返すの……。女子が振りまく上辺だけの愛想ほど、残酷なものはない。永遠不変の真実だ。額に手を当てて、深々とため息をつく。
「俺、つくづく中学の時に、お前と出くわさなくて良かったわ……」
「ほほう、先輩もあんなふうだったんです？　てっきり昔から、腐った眼をして『ケッ』とか言ってたんだと思ってましたけど」
「さすがにそこまでじゃねーよ……」
アレでソレなボッチ野郎ではあったけど、別に家庭環境が荒んでたとか、そういうことはない――ありがたいことに。なので、普通にピュアでヤワでした。
「中坊の時にお前と会ってたら、名前を覚えられることもないまま、いいように顎で使われて終わりだったろうよ」
ていうか、今だってボク、あなたから名前で呼ばれたこと無いような気がするんですけど、気のせいですかね……。
俺の疑念など気にするふうもなく、一色は唇の内側で、そうなんだ、と呟く。頭の中で、どこぞの中学のガクラン着た俺が「いろはちゃ～ん」とか叫んでる光景でも想像しているのか……実際、中学の俺だったら、折本のとき以上に、こいつにコロッとヤラれてたに違いない。下手をすると取り返しのつかない傷を受けてダークサイドに堕ちていたかも。
「――なら確かに、先輩はラッキーでしたね」
顔を上げた一色が、ニッと口の端を吊り上げて、ワルい笑みを作って見せた。

「うんまあ、ラッキー……なのか？」
「決まってるじゃないですか。今になってこういう出会い方をしたの、なかなかタイミングが良かったですよ。なにしろ先輩みたいな取り巻きが一人増えたところで、私は別に嬉しくないし、むしろキモかったりウザかったりで損するかなって思いますし」
「そりゃどうも――すいませんねえ」
なんなの。一日に一回は、俺の悪口言わないと生きていけない病気にでもかかってんのか。
どんよりと目を濁らせる俺には構わず、一色は続ける。笑みを含んだ、くすぐったげな声が、校舎の壁に跳ね返って、耳の奥に降り積もっていく。
「この高校で先輩と会えたからこそ、私はこうして、カリスマ美少女生徒会長として覚醒を遂げたわけですし？　内申にもプラスになるし、クラスの陰でプークスうるさかったアバズ――女子どもも黙らせることが出来たし、プロムとか自分なりにちょっと楽しいイベントもやれたし。うん、なかなかいい結果です。私的にはかなりグッドですよ」
弾むような節回しで、一つ一つ数え上げていく。小悪魔さまはニコニコ笑顔で、くるんとその場で一回転すると、俺に向かって両手を広げた。
「うん、私にとっても今の先輩の方が、メリットありありの、ありまくりですね」
「さいですか……満足いただけてるんなら結構だが、さっきからお前にとって良かったことしか挙がってないんだけど」
「先輩だって、こんなに可愛い後輩と親しくなれたじゃないですか。ウィン・ウィンの関係ですよね」
「俺にとってのウィンって、なんです？」
「私からの感謝とか？」
軽口なのは分かっているが、反応に困る。後輩からの感謝は――そりゃ価値がないことも、ない。ただ、それが俺のウィンなのかといえば……。

「なんか不満そうですね」
「勝利条件がお前の感謝ってのがな。難易度ベリーイージーなのか、ナイトメアなのか。判断に困る」
本題から逸れるように、わざとそんなことを言ってみた。そんな俺の底意などお見通しなのか、一色はふっと悪戯っぽい笑みを咲かせる。
「冷たいですねー。私の方だって感謝してるんですよ。仕事とかめんどくさいし、イベント始まる前も、終わった後も、書類書いたりハンコ押したりばっかでめんどくさいし、とにかくホントにめんどくさいですけど――しっかり得るものは得てますしね」
そうして、一色は俺に向き直ると、姿勢を正した。愛らしい大きな瞳が、急に真剣な光を宿して正面から向けられて、思わずこちらの背筋まで伸びてしまう。
「改めて、進級おめでとうございます。昨年は先輩のおかげで、様々な困難を乗り越えることが出来、得難い経験を積むことも出来ました。本当に、ありがとうございました」
びっくりするくらい真っすぐな言葉とともに、綺麗なお辞儀が繰り出される。四十五度の美しい弧線が、残像のように目に焼き付いて、けれど自分の見たものがいまいち信じられない。完全に飲まれてしまって、軽口の一つすら返すことが出来ず、金魚みたいに口をパクパクさせるだけ。
そんな俺に、顔を起こした一色は、破顔一笑、またあのワルそうな笑みを向けた。
「どうです、こういう仕草もそれなりに板についてきたでしょ。入学式での本番前に、先輩にだけ、特別に先行上映です」
「……おう、かなり驚いた」
すげーな……まるで品行方正な生徒会長みたいだ。ちょっと前までナメた口調で「あー、仕事だりぃんですよねー」とか言ってた女と、同一人物とは思えない。いや、いまも時々そんな態度とるけど。
ふふん、と胸を張って、一色は得意のキメ顔をする。
「最近は先生たちからも評価されてるっていうか、なにかとニコニコ

笑顔で話しかけられることが増えたなーって実感してます。この調子でいけば、推薦とか狙えそうですし、来たる受験ではせいぜいオイシイ思いをさせてもらいますよ」
そう言って、カラカラ笑う。
そんなに簡単に推薦に食い込めるのかは疑問だが……まあ内申とて、マイナスよりはプラスの方が良いに違いない。それより先生からの評価が変わり始めているというのは素直に驚きだった。一色いろはは、決して優等生でも秀才でもなかったはずだから。
「すげーな、ほんと」
「ま、これも誰かさんが、会長やれって発破かけたせいですけど」
しれっと口にして、一色は笑った。
「かくして、いろはちゃんのスクールライフは、ほぼほぼウィンに王手です。あと足りないものは――もうちょっとの成績と、マトモな友達と、忠実な後輩と、あとついでに葉山先輩とか」
「ついでって……」
冗談です、と告げて、一色は身を翻す。
「さて、ではそろそろ私、戻ります。入学式の準備もあるし」
「ん――頑張れよ」
眩しいような気持で、その背中を見送りつつ、俺もぼちぼち昇降口へ向かおうとして――「おっといけね」と一色が振り返った。
「伝え忘れていたことがありました。二点ほど」
「ん、なんだ？」
気軽に問い返した途端、カウンターをくらう。一色の目元に、またあの真剣な光が宿っていた。
「私、こう見えて安い女じゃないつもりです」
「お、おう」
「なので、本当に心からの感謝は、そう簡単に人に示したりしません。心からの感謝って、それなりに重みのあるものだと思うんで」
「あ、うん……なんかさっきは、すみません」
自分の声が細くなるのが分かる。小さく縮こまる俺に、一色はかぶりを振った。

「けどまあ、男子を振り回して得意になってた頃の私って、ちょっとアレっていうか、我ながら器が小さかったかなーと思わなくもないので。あれも、もういいかなと。――そんなわけで、ナイトメアも目指しません」
　きっぱりとした口調に、俺はうまい返しも思いつけないまま、頭を手櫛で掻いた。
「そっ、か」
「はい。なので、自分で言うのもなんですけど、ここからの私は普通な方だと思います。私の勝利条件、きっとノーマルですよ。それは今、先輩に言っておいてやりたいなぁ、と」
　不敵な笑み。堂々としていて、チョイ悪そうで、可愛らしい笑顔。不覚にもやりこめられて、俺はモジモジと下を向くだけだ。
　一色はしばし満足そうに俺を見つめた。が、それからまた、あの真剣な目つきに戻った。
「それと、もう一つですけど」
「お、おう」
「入学式――あんまり驚かないでください。それだけです」

6、4月／入学式（2）

教室に入るには、少し勇気が要った。
今の由比ヶ浜と顔を合わせるのは、やはり俺には、ちと辛い。向こうだって、あるいはもう、俺とは顔を合わせたくはないかもしれない。俺はつまり、それだけの事をしたのだから。
が、いつまでも廊下に突っ立っているわけにもいかない。
意を決して、中に入る。
ガヤガヤとしたぼやきや、早口のお喋り、甲高い笑い声。昨日に比べれば落ち着いているが、まだ浮ついた空気が抜けていない。新しい顔ぶれになったばかりだし、完全に馴染むのはすこし先になるだろう。
海老名さんの姿はまだない。そしてもう一人、あいつの姿も。
まあ、なくてよかったというべきか。いまは由比ヶ浜だ。
彼女の席は、教室の窓際だった。
もう登校していたようで、机の天板に腰を下ろして、近くの友達とおしゃべりに興じている。当然ながら今日も黒髪のセミロングだ。知らない女子を見ているようで、胸が勝手にざわついた。
ふと目線が合う。形のいい唇に、微かな笑みが浮かんだ。
「ヒッ――じゃなかった、比企谷くん、おはよう」
「ん……おはようさん」
静かな挨拶。
笑顔はある。穏やかな声も。
が、かつての弾けるような明るさに満ちた挨拶とは、ちょっと、でも決定的に違う。あんな風に呼ばれることは、もうないのだろう。無視をされなかっただけでも、上々だ。
「今日から小町ちゃんも入学するんだよね。良かったね、兄弟で仲良く一緒に登校とか、ちょっと羨ましいかも」
「いや、そんなことしねーよ……あいつ、学校では俺と他人で通してるから。廊下ですれ違っても、俺をスルーして隣の奴にだけ挨拶するような感じで」

「他人どころか透明人間じゃん!?」
ていうか、普通に無視です。まあ無視も、ある意味、強いメッセージ性を伴ったコミュニケーションと言えなくもない。まったく、妹のサイレントコミュニケーションには困ってしまう。可愛いんだから。その気持ちをおもんばかって、ちゃんと話しかけたりしないし、五メートル以内にも近寄らないようにしている俺は、兄の鑑であろう。
「相変わらずだなぁ……ヒッ――比企谷くんらしいっても、言えるかもしれないけど」
「あいつ、表向きはパリピだからな。距離を取るのも兄の優しさだ」
呆れたような笑みを向けられる。どこまでも明るい、他愛のない雑談。俺は由比ヶ浜の目を直視しないように気を付けながら、話を続ける。
「でもさ、きっと小町ちゃんも、ホントは堂々と比企谷くんと、一緒にいたいって思ってるんじゃない？」
「いや、高校生にもなって、学校で兄貴と一緒にいたい女子なんていねーだろ……」
「あはは、それもそっか。ともかく、今日から本格的に最後の一年、お互い頑張っていこっ」
「ああ」
それで会話を区切り、俺は自分の席に向かいかけた。
「――あ、そういえば、姫菜と同じ塾なんだって？」
背中から追いかけてきた声に、振り返る。由比ヶ浜は目を細めていて、その視線は心持ち、下を向いていた。
「ん……ああ、その……偶然だけどな。俺も昨日は驚いた」
「そっか。あたしも勉強、頑張んなきゃだし、今からでも塾通おうかな、なんて」
少し気まずそうに、微苦笑を浮かべる。
数秒の空白。
「いやその、あはは、そんな深い意味はないんだけどさっ」
「……おう」
なるべく声のトーンを変えないよう意識しながら、俺は答えた。

「まあそうだな、俺んとこは授業は充実してる。けど、ちょっとハードだぞ。英語の女の先生は、毎回冒頭に宿題のチェックして、やってこなかった奴を前の席に座らせて晒し物にするし、国語の講師は、こっちが集中切らすと、途端にずびしっと当ててくる」
「うわっ……いい先生だけど、厳しい先生だ……」
「まあ、それなりに覚悟が必要だと思うぞ」
ちょっと失礼な言い方かもしれない。だけど由比ヶ浜は、今までが今までだったからな……。俺より一歩先に進んだとしても、急に勉強ができるようになる訳ではない。あの教室のプレッシャーに耐えられるかどうか。こればっかりは本人の覚悟次第だが……。
「分かった。考えてみる」
「おう」
そこで今度こそ会話は終わり。由比ヶ浜は何度かこちらを振り返りながら、友達とのお喋りに戻っていった。
俺も自分の席につき、息を吐く。
胃袋の方に、重しを呑んだようなわだかまりがある。変わってしまったもの、俺が変えてしまったものの重みだ。
けれど大丈夫。砂袋というほどじゃない。鉛のかけらいっこ分といったところか。思ったよりも軽い。
由比ヶ浜が、明るく話しかけてくれたから。
冷たい微笑で通り過ぎる、無表情で離れていく――そんな反応も、あるかもしれないと覚悟していた。
由比ヶ浜が優しい奴で、良かった。
――優しい女の子は嫌いだ――ああ、確かにそうだったんだけど。
カタチばかりの優しさに、ちょっとだけ救われるような、そんな日もある。

ＨＲもそこそこに、入学式だ。
アナウンスに従って、クラスごとに順番に体育館に移動する。
しかし大人数での移動となると、そうそう統制が取れる筈もなく、廊下に出ると、たちまちにぎやかな喧騒が巻き起こる。二年だろうが

三年だろうが、これは全然変わらないな。廊下のあちこちでワイワイ、ガヤガヤ、ノタノタ――。お前ら、もうちょっと早く歩こうとか思わないのかよ。
うんざりした気分で行進の列に加わっていると、不意に、ぽんと肩を叩かれた。
振り返ると、そこには――天使さまがご降臨なさっているではありませんか。
「八幡、久しぶり」
にこっと輝くような笑顔を浮かべていたのは、そうもちろん、大天使さまことトツカエルこと、戸塚彩加だ。
春休みの間も練習が忙しくて、床屋に行く暇がなかったのだろうか。色素の薄いサラサラの髪は、最後に見た時より若干伸びて、眉のラインに触る程になっている。南国の空の光を閉じ込めたような澄んだ瞳。ルネサンスの彫刻家が精魂込めて、最上級の大理石に刻んだような、柔らかな頬――。
はぁぁ……これだよ、これこれ。
「おはよう戸塚。久しぶりだけど、今日もやっぱり可愛いな」
「あはは、もう、またそんな冗談ばっかり」
まるで精緻なクリスタルの像が、命を宿して動くようだ。白い顔に浮かんだ、軽やかで甘い微笑み――はぉおおっ。
男の微笑にうっとりするとか、我ながらどうかと思うが、まあ仕方ない。性別を超越した魅力というのは、確かにあるんですよ。今ここに。レオナルド・ダヴィンチが悪弟子のサライに入れ込んでいたという気持ちが、ちょっと分かっちゃう。
「今年もF組だったんだね。僕は隣のE組」
「そっか。惜しいな、一クラス違いか」
くそ、神め。俺と天使の仲をギリギリで引き裂くなんて、血も涙もない奴だ。
内心で毒づいていると、ありがたいことに戸塚も、僕も残念だよと言ってくれる。そうして、少し感傷的な笑顔をみせた。
「いよいよ三年だね。高校生活もこれが最後って思うと、惜しいよう

な寂しいような……複雑な気分だよ」
「ん、まあな。俺も、いよいよ終わりかって思うと、なんかガラにもなく焦ったような気がしてくる」
「ふふ、珍しいね。八幡だったら、もっとデンって構えてるかなって思ったけど」
戸塚が目を細めて言う。
俺自身、きっと紗に構えて、慌てる人間を鼻で笑いながら過ごすんだろうと思っていた。去年の今頃とかは。
今のこうした変化が、良いものなのか悪いものなのかは、よく分からない。まあ、誰かを鼻で笑うような振る舞いをせずに済んだのは、良かったと思う。
戸塚が隣に並ぶ。歩調を合わせて、ゆったり進む人波に付いていく。
「焦りみたいな気持ち、僕もあるよ」
顔を前に向けたまま、戸塚が言った。
「部活もぼちぼち、最後が見えてきたからね。練習の合間に、あと何回コートに立てるんだろう、とかふっと思っちゃう」
「そっか。俺はそういうスポーツな青春送ってきたわけじゃないけど、結構しんどそうだな」
好きなもの、夢中になれるものがあるからこそ、明確にその終わりが近づいてくるというのは、気が重くなる事だろう。
大学でまたテニスを始めればいい、という話じゃない。総武高校でのテニスは、今が最後の時間を迎えようとしているのだ。
廊下の角を曲がりながら、ぼんやりと考える。戸塚には、あと何時間の練習が許されているだろう。その時間でレベルアップができるとしても、どの程度まで行けるだろうか。欠点を何もかも克服するのは無理だし、技術をある程度高められたとしても、今から劇的に強くなるのは難しい。現実は少年漫画じゃないから、必然、目標のリミットも見えてくる。
いや無論、戸塚や運動部員たちのやってる事を見下すつもりなんて毛頭ない。少しでも前へ、一歩でも前へ――その向上心は、多分、俺

に最も欠けていて、最も必要な資質だ。
ただどうしても、先が見えてしまっている物事を追い続けるという気力が、俺には薄い。ボッチを続けていると、諦める事ばかりが上手くなってしまう。戸塚と一緒に運動に青春を捧げていれば、あるいは、少しは違った性根になれていたのだろうか。
「……お前が誘ってくれた時に、やっぱりテニス部に入っていれば良かったかな」
階段を下りながら、冗談めかして呟くと、戸塚が目を丸くした。
「急に何を言うの？　まあ、僕も八幡と部活出来たら楽しいだろうなって思ったけど」
さすがに今からじゃ、たいして時間はないよ、と苦笑交じりに言う。全くの正論なので、俺は何も言えない。
「それにさ、僕、今は今で良かったと思ってるんだ」
「ははっ、そうか」
「うん。八幡が入ってくれたら楽しくなったと思うけど、僕、きっと八幡にべったり頼っちゃって、部の事とか、自分であんまり考えなかったんじゃないかな」
『――も、何かを変えようと足掻いて――――安易に手を貸すことが――』
「……そんな事はないと思うぞ。戸塚はしっかり者だろ」あと可愛い。
「ふふ、ありがとう。でも八幡が奉仕部にいてくれたから、色んな人と知り合う機会があったんだなとも思うんだ。おかげで楽しかったし、刺激になったよ」
だからこれで良かったんだよ――笑う戸塚の顔は、どこまでも晴れ晴れとしている。
俺は頭を掻きながら、少しだけ目を逸らした。戸塚は制服の着付けも美しい。Ｙシャツの襟の形の美しさ、しっかりと結ばれたネクタイの清潔さ――ほんの一秒くらいの間、それらに目を遊ばせてから、俺はとびきりの、気持ちの悪い笑顔で向き直る。
「ありがとう戸塚、そんなところも大好きだぞっ」
「あははっ、……あれ？」

朗らかな微笑で何かを言いかけていた戸塚が、何かに驚いたように、明後日の方に視線を飛ばした。俺もそれを、目で追いかける。

俺たちはようやく体育館の入り口をくぐっていた。中はパイプ椅子がきっちりと直線状に並べられ、その6割ほどは、もう生徒で埋まっている。前方に広々とした空席があり、そこが新入生たちの座るスペースだ。小町ちゃん、お兄ちゃんを見つけられるかしら……ドキドキ☆。まあ見つけても絶対無視するだろうけど。

戸塚の視線の先は、ステージの辺りだった。壇上にはスピーチ用に演壇が用意され、マイクの準備でもしているのか、生徒会メンバーが何人か動き回っている。亜麻色の髪――ああ、一色もいるな。なにやらわたわたと動いている。ちょっと雰囲気が固いような気もするが、やはり新入生を迎え入れる立場ともなると、色々と緊張するだろう。

しかし、特段おかしなものは見当たらない。

戸塚に目を戻すと、ちょっと戸惑った顔をしていたが、やがて気を取り直したように言った。

「ん……いや、ごめん、見間違えたみたい」

なになに？　お化けでも見たのかしらん。『おぃ、トモダチになろうぅよぉ～』とか言って襲ってくる天邪鬼とか。なんだか親近感がわく妖怪ですねぇ。

はにかみながらも、戸塚は「じゃ、またね」と可愛いく手を振って自分のクラスに向かう。俺も名残を惜しみつつ、自分のクラスの場所に向かい、椅子に腰を下ろした。

体育館には、倦怠と微熱が入り混じった空気が満ちている。後ろから「かったりぃ」だの、「駅前のクレープ屋の、新商品！　ヤバウマだって！」だのいう雑談が聞こえてきて、かと思えば、斜め前の席では運動部らしきガタイのいい男子達が、なにやら声を潜めて囁きかわしている。「――平浜中からの新入生に韋駄天てあだ名の奴がいるらしいぞ」「お、有望かよ」――勧誘の相談のようだ。自分たちの引退を控えた時節だろうに、新入部員の獲得を真剣に考えているっぽい。

何かが終わり、何かが始まっていく。

それはきっと、今日この場に限った事ではないのだろうけど。

俺は、何かを新しく始められているのだろうか？
それ以前に、終わらせるべきものを、ちゃんと終わらせているのだろうか？
――前までだったら、こういった思考自体を、俺は忌避していた。
変わる、成長する、終わらせる、始める――耳に心地良い、けれど結局は、今の己の否定にしかならない言葉の一群を、俺はそれこそ蛇蝎の如く忌み嫌っていた。そんなのはリア充どもの――あるいは現実から目をそむける輩の、成功者の、敗北者の――縋り付く、念仏みたいなものだと。
けれど今となっては、それも滑稽な言い訳か――いや、滑稽なだけならまだいい。
『責任がある』なんて、キザったらしい事をのたまいながら、俺は結局、誰に対しても責任を取らなかった。そんな自分を、また明日から、何事もなかったような顔をして続けていく？
想像すると、それはひどくおぞましい。俺の皮をかぶった醜悪な怪物が、俺のようなふりをして、俺の声で不実な言葉をわめき散らす――まるで昔話の天邪鬼のように。
それは、嫌だった。どうしようもなく。
けれど、ではどこに向かって足を踏み出せばいいのだろう？
俺は――。
プツッと、豆が弾けるような音が体育館に響いた。講堂の空気に、ノイズ交じりのザラザラした対流が生まれる。マイクのスイッチが入れられたようだ。
ああ、もう時間か――そんなふうに、のんきに思った。
「――皆さん、ご静粛に」
ざわざわと、草むらの葉擦れのように止まなかった私語が、ふぅっと消えていく。雲間から、さやかに顔をのぞかせた月に、地上の風が吸い上げられていくように。
うなじが、ぞわっと粟立つ。
アナウンスはよく透る冷たい声音で、耳に心地よい響きだった。俺はその声を、知っていた。

尻の下のパイプ椅子が、ぎしっと錆びた軋みを上げる。
「ただいまより、本年度の総武高校、入学式を開催いたします」
演壇――いや下だ、体育館前方の、角のコーナーに設けられたマイクスタンド。
「――え？」
誰かが、間抜けな声を上げる。
俺の前に座っていた男子生徒が、怪訝な表情で振り返る。それで、自分の喉からそれが出たのだと、遅れて気付いた。
だが、ばつの悪さを感じるのも一瞬のこと。俺の意識は前方に吸い寄せられていた。
マイクスタンドの前に立つ、凛とした姿。
早咲きの水仙に似た、ぴんと伸びた背筋に、俺は見覚えが――ありすぎた。
だけど。違う。視覚から入る情報が、致命的に記憶と噛み合わない。
あれは――。
「まずは、新入生の入場となります。厳しい試験を潜り抜けて、本日より一二六名の新たな仲間が、この学び舎に加わる事になりまし「――きのし――ぁ」」
かすれた呟きがマイク越しの美声に混じる。幸い、小さな声だったから、今度は誰も気付かない。よかった。――霞がかった思考の片隅で、そう思う。
マイクを通して、全校生徒にむかって話しかけるその女子生徒は、確かに俺の知っている、あの少女に違いなかった。水仙の立ち姿、雪解けの冷たい清流を思わせる眼差し、朝の雪原を抜けていく風のような声。
ただ。
「どうか皆さん、暖かな拍手と笑顔でお迎えください……それでは、新入生の入場となります」
言って、彼女は一礼する。いったんマイクの前を離れるのだろう。
下げられる頭。短い髪が、耳のそばで微かに揺れる。

――ああ、やっぱ姉妹だな。
場違いに、そんなことを思う。
髪を短く切った雪ノ下雪乃は、彼女の姉によく似ていた。

7、4月／入学式（3）

ビニールの包装をむしり取り、端のほうから一口かじる。

焼きそばパンは、いつにも増して味気ない。ソースが薄いモソッとした焼きそばと、柔らかいだけが取り柄のクチャッとしたパン。紙粘土でも食っているみたいだ。口の中で、二、三回咀嚼してから、コーヒー牛乳で強引に流し込む。それから、大きく息を吐いた。

昼に入る頃には、天気は上り坂に入っていた。見上げる空は、青々と冴えている。朝の仄暗さはどこかに行ってしまったように、今は雲も薄く、誰かがうっかりミルクをこぼしてしまったような、細い筋雲が数本、南から北に向かって伸びているだけだ。

今週いっぱいは花曇りだそうなので、これも一時的なものだろう。だが晴れは晴れだ。

春の晴天の下、特別棟のテニスコート脇の定位置――ベストプレイスで食べるパンは、それなりに美味い。美味かったはずだ。それが今、こうも味気ないのは、俺の心理状態が原因だろう。疑いの余地なく。

入学式はつつがなく終わり、そして気付けば、午前の授業も終わって、昼休みに入っていた。その間の記憶はほとんどない。あの体育館に、魂を置いてきてしまったように。

教室に戻った時、由比ヶ浜はどんな顔をしていたのだろう。確かめるのが怖くて、彼女の方を向けなかった。

自分にあきれるしかない。妹の入学式の日に、何をやっているのだ。

それとも入学式という行事が、よくよく俺に厄縁があるのか。

あの二年前の日も、ろくでもない入学式だった。

たかだか十七年しか生きてはいないが、人生において怪我といえる怪我を初めて経験したのはあの時だ。体が自由にならない状態というのを、知った。それまで当たり前に出来ていた事が出来なくなる。与えられているという自覚もなく、無意識に使っていた能力が、失わ

れる。
肉体と精神には優劣などないと、あの時に身をもって知った気がする。
ただ歩くというだけの事が困難になると、俺は足元に、常に不安や心細さを覚えるようになった。背後からの気配をオドオドと気にして、トイレや売店に行くのにも腰が重くなった。病院の廊下で、誰かから危害を加えられる心配をしていたわけじゃない。単に急いでる人をかわせないとか、邪魔になるかもとか、その程度の些細なストレスだ。些細ではあるが、不愉快な。それが毎日。それを避けようと、病室に籠ってなるべく出歩かないようにすると、それはそれで気が塞いでくる。四方数平方メートルの空間に意識が閉じ込められると、今度は精神が窒息を起こすのだ。
ストレスのおかげで、1週間くらい後、見舞いに来た小町から『目つきがゾンビからギガゾンビにランクアップした気がする』と評された。後で病室の鏡をのぞいてみると、本当に陰険な爺さんにも似た目つきになっていて、自分で驚いたのを覚えている。
肉体と精神には、優劣などない。
今は、体に故障を抱えているわけじゃない。ただ、今までどうやって学校生活をやり過ごしていたのか、思い出せなくなっている。廊下の曲がり角を曲がった時、ふと見知った顔を認めてしまったら。――その想像は、ヒビの入った足が、時折思い出したように脳に痛みを送り込んでくるのにも似て、俺をきりきり舞いさせてくる。校内そこいら中が腫れ物だらけで、うっかり知っている目と視線が合うだけで、激痛に飛び上がりそうだ。
無論、全ては自業自得なのだけれど。
楽しくもない物思いにふけってるうちに、気が付くと手の中からパンが消えていた。同じくカラになっていた紙パックを握りつぶして、ゴミ袋に纏める。
食い終わってしまった。どうしようか。
教室に戻れば、由比ヶ浜と顔を合わせるかもしれない。――思ってから、同じクラスなんだから当たり前だろうと自嘲する。さすがにも

う、時間も経っているし、彼女の反応を気にしなくてもいいだろうが……。

対面するのが嫌なら、逃げ回るしかない。いつまでも、いつまでも。

不可能な希望。いつまでも逃げ回るつもりなら、いっそこの学校から姿を消すしかない。

不甲斐なさに、何度目かのため息が漏れる。

――そのとき、ポンっと、固い音が耳に飛び込んできた。

顔を上げると、テニスコートの端で、体操着姿の男子生徒が、ラケットを手に壁打ちをしていた。戸塚……ではない。体格がはっきりと違う。

周りを見回すと、他に生徒の姿はないのに気づいた。戸塚も、他のテニス部員も。

新年度になって間もなく、しかも俺たちは三年だ。みんな、色々と忙しいのかもしれない。テニス部もそうだろう。ならあそこの男子は、単に暇つぶしで打ってるだけか。

まじまじと見つめ、そして息をのんだ。

「葉山……」

長身に、程よく筋肉のついた、あのスマートな体格。どうして気付かなかったのだろう。

目を凝らすと、肉体の躍動に合わせて、頭部が陽の光で煌めくのが見えた。西洋の御伽噺に登場する騎士のような、黄金に輝く髪。

白皙の横顔は、しかし傷の痛みに耐えるように、固く食いしばられている。壁を睨みつけるその瞳は、暗く鋭い。

それにしても、まさか全く気付かないとは。

理由は分かっている。独りでコートの隅で壁打ちなんて、葉山隼人にこれほど似合わない行動もない。これっぽっちも予想していなかったから、目が姿を拾っていても、脳がその情報を正しく噛み砕かなかったのだ。

改めて周りを見回すが、やはり近くに誰かの荷物が置いてあるなんて事もない。戸部達の気配も、三浦らの姿も見当たらず、つまり本当に独りだ。

そんなことがあり得るのか？
あの、葉山隼人が？
戸惑うまま、彼の姿を見続ける。フォームは美しく、跳ねる四肢はしなやかで、やはりこんな時もあいつは葉山隼人で、しかしその動きに、少し荒々しさが滲んでいる気がして、俺はなぜだか、首の辺りに息苦しさが戻ってきているのを感じる。
ふと、葉山が顔を上げ、目が合った。
壁打ちが中断され、トン、トンと、ボールが打ち捨てられたように地面に転がる。
真空のような一瞬が、コートを横切る。
やがて葉山はばつの悪そうな苦笑を浮かべると、こちらに近付いてきた。
「よお、昼も一人なのかい」
「そーだよ。悪ぃかよ……」
「はは、いや、これはこれで、気楽で良さそうだと思っただけさ。気を悪くしないでくれ」
近寄ってきて、しかし無論、俺の隣に腰を下ろすようなこともなく、葉山は俺から、人ひとり分の間を空けた場所で、腕組みをして、足を止めた。
二人並んで、今までこいつがいた、無人のコートを眺める。
礼儀として、俺からも尋ね返した。
「そういうお前も、今日は一人、か？」
「ああ。皆いろいろある。新しいクラスに馴染む時間も必要だろうし」
そういうこいつ自身は、当然のように新しいクラスでも中心の座を得ている。なにせ他ならぬ俺の、斜め前の席が、こいつを中心としたリア充どもの社交場だ。新学期二日目にして、早くも俺は、白鳥の湖に迷い込んだカラスになった気分だった。
間近でこいつの姿を見ていると、こいつの処世術が上手いというよりも、むしろ場の方が、葉山隼人という人間の形に合わせて、それにぴったりの隙間を作ろうとしているのではないかと思えてくる。良

い悪いは置いておいて、スター人種の宿命みたいなものだ。戸部たちは、この一年、葉山に付いていくのも大変かもしれない。
「――しかしまあ、珍しいな。テニスの壁打ちなんて」
「午前の体育、体操だけだったろ。ちょっともの足りなかったから、ついそのまま、ね」
確かに午前最後の授業は体育だった。新年度早々ということで、厚木による講義……というか説教と、軽い体操だけで終わりで、ブチブチ文句を言ってる連中も何人かいたが。
「運動したいんなら、それこそお得意のサッカーとか、他にも色々あるだろうに」
「腕を使った全身運動がしたい気分だった……と、そういう事にしておいてくれ」
苦笑いを浮かべて、葉山は弁解する。その先をあえて追及する気にはなれなかった。
俺という人間は、結局のところ、陰キャだ。鬱屈が溜まってきたらスポーツで解消する、という健全な思考には、頭が向かない。仮に向いても、やる気までは伴わない。
それでも、今はこいつの気持ちが分かってしまうような気がして、それが少し、面白くない。
風が頬を撫でた。海から陸に向かっていた流れが、反転し、逆しまへ変わり始める。この場所でだけ感じられる風の移ろい。今日という日の、折り返し地点を過ぎた合図。俺は何度も何度も、この場所でこれを感じてきた。感じて、ただ無邪気に、その感触を楽しむだけだった。
俺がそれを感じてきた分だけ、幾つもの『今日』が、後ろへと流れていったのだろう。
「比企谷、良かったら俺の相手をしてくれるか？」
だしぬけに。
たった今、ふと思いついた――そんな調子で、葉山が口にした。
あるいは、本当にそうだったのかもしれない。
「あー……いや、悪いけど、飯食った後はあんま動きたくねえんだ、俺」

「はは、そうか。悪いな、気にしないでくれ」
会話が途切れ、そのまま数秒が経過する。葉山は壁打ちを再開するでもなく、俺の傍で、誰もいないコートを見つめ続ける。古びたポールに、端の少し破れたネット。舗装の綻びだした地面。見えるものといえばそれくらいだ。こいつには何か、他に見えている物があるんだろうか。もしもあるとしたら、それは想像とか記憶とか呼ばれるものだ。この時間、この空間に属するものではあり得ない。
「……言いたい事があるんなら、はっきり言ってくれ」
自分の口から出たのに、知らない男の声みたいだった。
葉山が、はっと息をのむ。一拍遅れて視線が険しくなり、俺はそれに引き込まれるように、地面に着いていた手を、拳のかたちに握っていた。
「今、君に言うべき事はないよ。つまり、改まって話すべき事は、という事だけど」
「そんな風には見えなかったけどな」
「本当だ。……そもそも俺には、口を出す資格なんて無いんだ。とっくの昔に」
――またそれか。
そう、思ってしまう。
胸の奥から、灰を吹き払った熾火のように、熱く、赤々と燃えるものが目覚め始める。でも、俺にとってもこれは余計なものでしかない。ありったけの理性と言葉を、灰のように降らせて、鎮めにかかり――それでも、燻ぶる火の粉のような思考が、唇の隙間から漏れてしまう。
「お前さ、いつまでそれ、続けるつもりなの？」
葉山は少しだけ痛そうに、ピクリと眉をしかめた。
「……いつまでもなにもないよ。過去は、どこまでいっても過去だ。俺は、それを受け入れ続ける」
その言いざまが、ひどく癇に障る。
いつまでも癒える事のない古傷を、何度も何度も、自分の指でほじくり返し、新しい血を滲みださせる。そんな、苦痛を確認するためだ

けにあるような行い。
なぜ、と思う。
今さらどうしようもないというなら、なぜこの学校に来た。総武高校を遠慮して、都心の進学校に通う事だって出来ただろうに。
一生消えない、烙印のような後悔。
羨ましいとさえ思った。あの時は。
だが。
「俺に勝手に託すなって、言ったろ」
「ああ。それは済まない。けど俺も言ったはずだよ。君のするべき事は、そんな事じゃないって」
剣戟のように、視線が空中で切り結び、鍔迫り合いにもつれ込む。
数合の押し合い。
やがて先に目を逸らしたのは、やはり俺だった。
自分の愚かしさ、みっともなさに、ため息が出そうになる。俺には、こいつといがみ合う理由なんか、どこにも無いのだ。いまとなっては。
「……お前が満足できる結末とやらが、どこに落ちているのかは、俺の知った事じゃない。というか、本当に知らないしな」
本当に分からないのだ。あるいはもう。
カラの拳を、くっと握りしめる。爪が掌に食い込むくらい、痛く。
「比企谷、君は、」
言いかけ、言葉が途切れる。葉山の目から力が失われ、視線がそのまま下へ下へと落ちていく。諦めるように。目の前にいる俺を、見限るように。
別に、その事には何も感じなかった。
もともと俺は、誰かの信用を背負って立つような奴じゃない。信託の言葉はただ鬱陶しく、期待の視線は煩わしい。それどころか、相手が腹の底で何を企んでいるのかばかり気にするような性分だ。同意もなく、一方的に押し付けられた期待なんて、ただただ迷惑でしかない。
この男はきっと、そういった一方的な期待を全部飲み込み、背負い

込んで、ここまで来たのだろうけど。
「すまんな」
弾かれたように、葉山が顔を上げた。突然殴り付けられたように頬が歪んで、見ている俺の方が痛みを覚えるような表情をしている。
「結局、俺も間違えたんだわ」
口にして、しかしその言葉は、すとんと胸に落ち着いた。そうだ。俺もついに、青春の間違いとやらを、犯してしまっていたのだ。気付くのが――否、認めるのが、遅すぎたけど。
言葉も動きもない。葉山は、特大のヘヴィブローを鳩尾に食らったように、ふらと突っ立って、あえぐように俺を見ている。
やがて、「いや」と苦しげな息が漏れた。
「比企谷、君は何一つ間違っていなかった。きっとね」
その言葉は、まるで慰めみたいで、けれどもちろん、そんなものを、葉山隼人が比企谷八幡に与える筈もなくて。
「ただ……正しい答えだけじゃ皆が幸せになるのは難しい、それだけの話なんだ」
しばらく、時が止まったようだった。
やがて言葉もなく、葉山が背を向ける。
遠ざかる足音を聞きながら、俺はもう一度、空を見上げた。
青い空には、もう雲の影も見えない。さっきまで漂っていた筋雲はどこかに吹き流されて、ただ柔らかな春の光だけが広がっている。
ため息すらも出てこない。どこまでも落ちていきそうな沈黙。
俺はしばらく、その虚無感をじっくりと味わっていた。